ㅋ5L50
96-238

感應術及催眠術秘訣

自序

現下我邦でも大分催眠術を研究する者が出て來たが、また其著書は無い樣に思はれる。適々一二の著書が有つても、成な外國書の飜譯物で、乃ち自己の意見と實驗上の事を記した者は更に無い仍て、余は十餘年來、研究もし實驗もしたる成績に就て、爰に「感應術及催眠術秘訣」と題し、即ち此書を公にするに到つた、

其處で此著書に就て、特に世人に斷はつて置く事がある、それはドウカと云ふと世の學者は、動もすれば催眠學と稱へて只管催眠にばかり重きを置く樣だが、余の

考は、それとは少しく反對で、所謂催眠なる者は、たゞ感應を爲すの一助たるに過ぎず、乃ち催眠術其者は、獨立しては何の効も無いもので有ると云ふ事を斷言するに躊躇せんので有る、

殊に感應術の効益は、方法に因ては催眠を要せざる者であるから、余は特に此書に題しても、主として「感應術」と云ふ文字を附したので有つて、今の世に行はるゝ催眠術一點張のものとは、おのづから其趣を異にして居るので有る、又感應術の應用は、世間百般の方面に於てしても、頗ぶる効益ある者ではあるが、余は醫士たるに

由つて、他の事には多く云はず、特に治病の方法たる、乃ち感應療法に就て、多く論ずる處が有る、

尙ほ此他の事は、大低本文に記して有るから、敢て蛇足の辯は添へず、たゞ之だけを簡短に記して、いさゝか自序の責をふさいで置くと云ふ。

明治卅六年四月

著者誌

目次

第一章　感應術とは何ぞや……一頁
第二章　社會の潜在的要求と感應術……二十一頁
第三章　感應術の原理……三十七頁
第四章　感應術と感應療法……六十六頁
第五章　感應術類似の諸術及これに對する批評……九十一頁
第六章　催眠術及要訣……百二十四頁
第七章　感應療法の實驗……百八十六頁

第八章　感應の適用　附結局……二百六頁
以上

感應術及催眠術秘訣

富永勇著

第一章　感應術とは何ぞや

學者の疑惑、野人の驚嘆とは、同一事なりと、古昔ソロモンと云ふ聖人は曰はれたゲナ、

荒まじき勢力を以て、進歩し來つた科學の領土が、擴がり勝りて、今では、物質界のみならず、心靈界へ、宏大なる影響を及ぼして來た、宗教界、道德界への關係は論を竢たず、哲學上、心理學上に於ける學說の變化は實に驚く

べきものだ、否、變化といはんよりは、進歩と云ふが適當だ、進歩したる新らしき學説が、續々稱導されるので、吾人の智見は著しく發達して來た、それが爲に從來疑惑として、固く迷雲の裡に藏れて居た事柄が、片っ端から解説されて、事毎に、野人は喫驚三嘆してばかり居る、近世稱導された學説の中に、殆ど完全に證明された理論が、二タつある、新説と云へば、無論この二タつには限らぬが、余輩に取りて恩惠とも光明とも見るべきが、それで、即ち二法一元論と体心双關論とを指して云ふのだ、この二大議論が、こゝに稱導せんと欲する感應術の

根本で、憑據で、權威の由りて生ずる所以で、これなくば、感應術の説明は、一切出來なくなるのだ、二法一元論の概略は、宇宙には、天然の一大法則がありて、これに依りて、萬物悉く支配されて行く、大は、日月星辰の運行より、小は濱の眞砂の一粒の動靜に至るまでも、或は、又、天地間の現象に、幾千万の差別變化があると見へても、一つも、この法則に洩るゝ事は無い、交互して、錯綜して、混乱して居る樣な狀態の中に、一系紊れぬ整然たる秩序がありて、無究より、無究へと歩を運んで居る、これと同時に、人の心靈にも、亦、嚴然たる一定不變の法則が行はれ

て居て、古人も、今人も、賢人も、愚人も、皆これに律せられ、われ獨り、衆に離れて、勝手な成り行きを得る能はずと云ふことに爲りて居る、所で、この天然法と心靈法とは一元である、即ち二法一元であると云ふのだ、而して、假令は、原因結果は、物心兩界全樣に行はるゝでは無いか、勢力の消長も、勢力の不滅の工合も、同樣に行はるゝでは無いか、或は凡ての現象は、勢力の發現であるが、勢力と形象との變化は、是亦同樣で無いか、抔と種々の方面から證明して居る、

次に、体心双關論の概略は、人は云ふまでもなく、四肢五

体を具備して居る動物で、即ち生き、動き、作用き、睡り、死するのである、この點から云へば、他の諸動物と同一でありて、唯、彼等に比べて高等であると云ふだけのことだ、然るに、人はこの他に、心靈の作用を有して居る、而して、心靈の作用と云ふのは、肉体から起るのでは無い、別に、靈魂なるものが、存在して、それが、作用くのだと云ふのが、古代からの學說だ、尤も、其後に至りて、新說が續々出て、今では、この古說の信者は余程減じて來たが、兎に角、人には靈魂なるものがありて、肉体に寄宿りて居る、且寄宿りながらも、或る場合には、肉体を離れて作用ら

く、尚、全然、肉体を離れて後、自由獨立の存在をも、作用をも、爲すと云ふのが、各國押並べての、古代からの通説だ、即ちこれが二元論と云ふのであらう、スルト、近代では、又、人は一元である可き筈だといふ説が行はれ初めて來た、それは肉体を離れて靈魂の作用く可き樣は無く、靈魂の作用の無い肉体とは、死体を意味することでは無いかと云ふ議論だ、而して、それには、心靈に重きを置くのと、肉体に重きを置くのとの二論ある、即ち、唯心論と、唯物論との區別がある、尚、又、其他に、平行一元論といふのもあるそうだ、これは飽くまで、人は、一元であると

主張するのではあるが、其作用き方は終始体心の平行するもので、決して其内一を欠くことの出來ぬものであるこの説だ、さて、其諸論何れを取るにしても、体心双關の理を説明するに就ては、毫も關する處なしだ、從つて、其理論に、甲乙是非の批評を試むることは仕ないが、事實上の研究をして見て、或る場合に、肉体に一種の變化を與へて、其影響を心靈に及ぼさしむることの、充分爲し能ふが如くに、亦、心靈の能力に依りて、肉体が左右せらるゝことも能き得る、といふことが、了解された、生理學、解剖學の進歩した結果としては、生活機關の、其作

用に伴ふ形狀的變化が、細密に知られ、亦これにも勝さりて、心理學が發達した爲に、兩々相應じて、この精緻の試驗考究を爲し、斯くは科學的の證明を得た譯けだ、即ち心靈の作用の工合で、肉体の原質も、形狀も、運動の狀態も變化する、又肉体に理學的、或は化學的の刺戟を與て、變化を促すと、直に、心靈に其影響を通達せしむると云ふのが体心双關論だ、して見れば、必竟する、二法一元論も、体心双關論も進歩したる科學の産兒だ、科學は知見の母だ、科學は不明を切るの大利劍だ、進歩したる科學には、抵抗する矛も盾も無いのだ、それの侵す所感く

覆がへされるのだ、

こゝに、余輩の一見解がある、即ち進歩したる科學の竄入して來てから以來、まづ流俗的宗教の根基は破壞された、俗說的倫理の土臺は危殆くなつた、自から高等の宗教と誇稱して居る耶蘇教さへ、其信仰箇條の眼目に置かれた奇蹟は、神人の行でも無い、超自然的の所爲でも無い、普通必然の行爲であると認められて來た、況して下等の宗教の副生物たる禁厭、加持、祈禱、先見、豫言、示現、夢想などは、みんな、科學的に或る方法を實行すれば必ず實現し得る一種の現象で、不思議でも無く、又有り

難い事でも無いことが確認されて、其眞相のつまらないものだと云ふことが分曉つて來た、

昔者晉の葛洪、宋の希夷と云ふ人等は、人世の興廢を未然に察して、天眞の一元（何の事だか知らぬが）とかを身に修し靈化したと、古書に記してある、又、那撒の耶蘇は四十晝夜の間、飲食を廢して尙死なずに居つたゲナ、そして死際は十字架上で磔殺されたのだが復び蘇生して昇天したと、是も古書に記してある、わが朝には安倍晴明とか、役行者とか云ふのが、奇術者の代表者で、其歷史は奇怪不思議の事柄で、充たされて居る、其他、諸宗の祖師、最澄、空海、親鸞、日蓮などの上人等は、各競ふて奇蹟めきたる事を行つて通過つたが、今から考へて見ると、それは屁でも無いことだ、必ずしも不思議ではなし、又不可能のことでも無し、決して驚く程のことは無い、其理を推して、其道を學んで、行ひさへすれば、誰にでも能きる、彼等の能ふ所は已れにも、彼等の行ふ所は他にも、皆行れるのだ、中風の患者を立たしめたり、盲者の眼を明けたりするのは、一擧手の勞で、人に命じて、海上を徒歩かしたり、人を制して、言下に自殺せしむるなどは、瞬間の呵成だ、其上、斯かる奇行異蹟は、人間にのみ應顯を限るで無い、

禽獸でも、蟲魚でも、艸木でも、金石でも全じた、云はば天地萬有、一として、其宰配に洩るゝことは、能きぬ位のものだ、而して、斯く古昔の智者賢哲を凌ぐ程のことが能きるに拘はらず、其方法は極めて、平易で、無雜作で、百發百中である、さすれば、これを行ふには、人、其人を撰ばねばならぬかと云へば、それも要らぬ、聖人で無くも良い、仙人で無くも良い、唯だ、平々凡々のわれらで足りる、ナント世人は、この言を聽きて、幾底の怪訝を抱くであらうぞ、

必竟、これは科學の賜ものだ、物理、生理、心理、哲理、等の諸

學が、著しく發達して、天然の法、心靈の法、身体の法等が明瞭に爲りて來た爲に、宇宙の一現一象も、人の一動一靜も、其反應を前知し得る樣になり、又、反應を見ては、原狀を査察して、殊に精確に外づれぬ樣になり、それから、益々進んで來て、われと他との間に、自由自在に、心靈作用の交換を爲し得る樣になり、遂には、自己の心靈作用を以て、他の心靈を左右することが、能きる樣になつた、既に、他の心靈さへ、左右し得られるのだ、肉体を左右し得ることは勿論である、又艸木金石へまでも、全樣のことを施し得られる樣になつた、即ち、斯かる、有力の方法

が、科學の進歩に本づきて發見されたのだ、そこで、前段列叙べた奇行異蹟などは、この發見された方法を、巧に應用するなら、今云ふて今能きる、

若しも誰かゞ、この發見を應用して、この方法を實行すれば其結果は如何であろうか、それは、想像も及ばぬ位であろうと思はれる、まづ、人の生命の與奪の權を握つたと同じで、其生殺は隨意になるし、或は人の德義の標準を指命すると仝じで、其善惡邪正の觀念を混淆して、良心の機能を麻痺せしめて、仁愛、正義、貞操、節義等の諸念を破壞することも隨意になるし、或は他をして、殺人、

放火、偸盜、姦淫等の諸惡を爲さしむるのも、好惡憎愛を顚倒せしむるのも、魯鈍を翻して、明敏と爲すのも、賢明を覆へして痴呆と爲すのも、みんな、隨意になるのである、されば、斯かる所以の理を推し及ぼして、今の醫術の及ばない難治の諸病を癒す位は、なんでも無ひ、極めて容易き事であるのだ、

固よりこの方法を實行するのには、格段の巧妙なる熟練が要る、習得、直ちに其効果を收めると云ふ譯には行かぬ、が併し、斯の道に入りて後、知見も養ひ、實驗も積み、研究に怠りなく勉めさへすれば、自得は期して俟つべ

した、

以上陳述した樣な次第で、この方法は、實に、天の一方より、天降つた福音と云ふても良い位だ、であるから、余輩は大に稱導して、疾呼して、社會の注意と、一顧とを喚起したいと思ふのだ、暫らく、試に、事實上の効驗を擧げて見ようか、

即ち、この方法を教育上に利用するなら、

人生の發達と、身体の發育に伴へる諸種の情感的誘惑(所謂少年血氣の勇から生ずる無分別の所行、例令ば不義の名譽心、色情、好奇心、輕佻心等)は、即時に防ぐこ

が能きる、而して、天性固有の惡癖、又は、弱點などは、これを抑制して、却て、美德の要素とすることが能きる、

若し又醫術上に利用するなら、

醫學上の理論の研鑽が、また充分に達して居らないが爲に、正確な治術の發見されて居らぬ病氣が、幾千もある、從つて、不治の疾病に罹りて、苦悶呻吟して居る半死の生靈が多くある、それらを確實に救ふことが能きる、忌憚無く云はしむれば、萬病一も治せざる無しと、主張して見たいのだが、假に一歩を讓るとして、若し難症の苦患者を、僅に、一人救ふても、大効益で

はないか、

若し又社會政策に利用するなら、

無賴漢の無賴を矯める、盜兒の盜心を制する、人心を善導するのに最も力ある感化の根元だ、この方法の遍ねく行はれたる曉には、感化院も、養育院も、監獄も一切不必要になる、こんな制度は全廢して仕舞へる樣になる、

若し又風教上に利用するなら、

宗教に對しては、信念を篤實堅固にさせることが能きる、安心立命を確實に得させることが能きる道德

を堅く守らせることが能きる、日常の風儀や品操に對しては、倫理の觀念を充分に守らせることが能きる敗德の誘惑に打ち克たせることが能きる、或は、又、其害毒、蝮蛇より恐ろしき淫祠一流の、下等宗教を打ち壞はし、其專賣品の御加持、御祈禱、呪咀、禁厭などの眞相を曝露させて、成程つまらないものだと合点させる、而して、不知不識の間に、愚夫愚婦の迷妄を醒まして、正道へ導く、それで世の中を、一圖に恐怖がりて、畏縮で、戰々競々として暮らして居たものを、大膽に快活に、堂々として、生活させることが能きる、

商事上に利用するなら、

商機の變動を、遠隔の地に居りながら、電話、電信よりも、速に知ることが能きる、例令は、株式や、米穀取引所での立會に、東京兜町の場を、即時、否、全時に、大阪に居ながら、都度々々に知り得るのだ、一錢一厘の高低をも、過たず、知り得ることは、宛がら、其場に臨んで居るも同樣だ、

其他失物や走り人の所在を明らかにして、辻易者の膽を奪ふなどは、可笑しくも、亦、妙ではないか、要するところ、人の心靈の能力の及ぶことなら、殆んと應用の道無、

きは無しである、

而して、屢陳辯する如く、これは、唯、或る方法を實行するだけのことだ、巧妙なる熟練で、應用を爲すこと云ふだけだ、即ち、余輩は、この方法を指して感應術 Inspirationskunst と稱して居るのである、

第二章　社會の潜在的要求と感應術

偖ら世間の實態に就て、人心の傾向を觀察するのに、社會には、一の大要求が潜れて在る、が併し、其要求は何であるかと云ふことに至りては、實は、吾も、人も未だ覺り

得ない、漠然暗中に物を尋ねるが如くで、太だ曖昧模糊として居る、由來この潛在的の要求とは、何を意味するものであろうか、いざや、余輩はこれを研究して見たいと思ふのだ、

或人の曰くには、明治維新以來、教育の制度が幾度か廻轉して、遂に、現代のことは爲つた、而して、この當今の教育の實態を、一面から觀察すると、如何にも高大の進歩ありで、誠に、明治聖代の美事の樣に見えはすれど、窃に、其裏面を窺ふて見ると、隨分、識者の杞憂を禁じ難き樣な遺憾の事柄が幾干もある、今の教育の仕方は、機械人形

を拵へる樣なもので、小智しき人、小器用な人、楊枝で重箱の隅を穿ぢる樣な人などを養成するには、敢て遺憾もないが、人の意氣を振ひ興したり、人の氣魄を高めたり、人の品性を偉大ならしめたり、所謂冷腦熱腸といふ樣な、同情同憐の深かい、人の中の人とでも云ふ樣な、俠義仁慈の英傑を造りなどするには、太だ不適當だ、昔時は學校が塾舍風であつた代はりには、師匠の固人的感化力が熾盛であるし、亦、師に其人を得れば慈母が赤子を育つるが如くに、啓蒙の妙を盡して呉れるから人物と云ふ点から云へば、甚だ偉大な人物を養成し得られ

た、古今の教育實態を比較して見て、今の古に及かざるを呶々するものゝあるは、強ち無理ではないと、余輩は、そこで云ひたいのだ、倘し果してこの曰くの如くなら、其罪は何れに歸すべきやだ、教育者の罪なのか、教育制度の罪なのか、まさか、今人必しも古人に劣ると云ふ理は、あるまい。今人の中にも感化力に富み又啓蒙發展の妙術に長けて居るものが幾干もあろふ、さすれば教育上現今の不備は要するに制度の不備にあるのは勿論だ、古能きて今能きぬと云ふ道理の無いは是亦勿論だ、處で余輩の稱導する感應術を教育上に應用すれは、この制度の不備欠陥を補ふて、現代の教育實績の上に、尚感化啓發の妙能を添へて、偉大の人物を養成し得る樣になるのだ、人物養成の新法は、即ち社會が潜かに要求して居るものゝ一つでは、あるまいか、さすれば感應術は、この要求を充たす一要素である、これ其一だ、又或人の曰くには、漢法の醫術か頽廢れてから既に三十年を經た、蘭法の刀圭家が影を收めてから亦既に二十年を經た、今では獨逸一流新進の醫學が跋扈して宛から天下に敵無した、醫學者の高言と世間盲目の雷同者との云ふ處を聞けば、今の醫術は完全無欠で、萬病一

も治せざる無しとの樣に思はれは、するが、退て窃かに其實情を觀察すると決して、そんなことは無い、第一、不治の病、否醫術で治し能はぬ病は、まだ澤山ある、加之、縱し治し得る病にもせよ其治療の方法が昔時の療法に比べて、或は完全と云へは、そうではあるが、却て迂遠に且苦痛多き方法に爲つて居るのが幾干もある、無學者或は愚人の輩は、醫術は一圖に六ツケ敷きものと冒認して居るから、疾病に臨んで醫治を乞ふ時は、ドンナ數醫の言ふことでも、云はるゝ隨意々々、盲從して居れと、識者は常に醫治の方法を觀察して其不全を嘆じて居る唯嘆じて居るのみでない、尙も優つた良法のありそうなものと考へて居る、吾人をして忌憚なく云はしむれは、今の醫術は實際意張られたこと斗りは無い、言はゞ不完全なものだと思ふて居る、嘗て英國の「ケンブリッチ」哲學會の會長「ハンフリー」氏は某所の醫會で「余は率直に語らん、今日の會合は醫者のみの會合であるから云ふが、醫術の四分の三は當て推量でありますな」と演說した世人はこの演說を聞く毎に、何と感ずるか、必同感であるべき筈だと、

余輩は、そこで又云いたいのだ、現時の醫學は實際に就

て驚くべき程、進歩しては居るが學術上の理想から云へば、無論前途は甚遼遠たが併し、窃かに考へるに當今の風潮に依りて卜して見れば、科學は奔馬の勢で進む折柄なれば必しも醫學上の系統を追はず、頓がて思はぬ方面から、科學の幇助を藉りて、今の治病の術に勝れる簡便的確の方法が發見させるであろうと、しかも、これは遠き未來ではあるまい、又斯かる治術の發見は、是非得たいものであると、余輩のみならず、實は一般の識者が潜かに仰望して居るのだ、さて、それでは簡便的確とは何を意味して居るのであろうか、固より危險なる

劇毒藥を服用して激烈の効果を得たいとのことでは、あるまい、又堪へ難い樣な苦痛を、縱令一ッ時にもせよ與へて、病勢を挫かんとする方法でもあるまい、中毒もせず、瞑眩もせず、身体を傷らず害はず精神を不安に陷れる樣なことはせず、苦患を身心に感せしむることはせず、虚心平氣の間に病根を平らげて治癒せしむるものでなくては叶はぬ、飜へりて今の醫術を見て、これを評するなら、或人の云ふた如く、迂遠で、煩勞で、苦痛で、被治者の身に取りて迷惑なことは、恰度繁文褥禮のお役所と同樣であることが多い即ち現代の醫術では不滿

足である、何がな勝れる方法のあれかしとは、社會の要求ではあるまいか、そこで若し余輩が稱導する感應術をこの點に利用するなら、屢前述したる如く最も適當の効驗を呈するものを、即ちこの感應術を推薦してこの要求を充たすのだこれ其二だ、

又或人の曰くには、古諺にもある通り、世の中は盲者千人明者千人だ人は心々なものだ、一ッ件の學者で居ながら、つまらない事を氣に懸けて、迷信の巷に彷徨ふて居るものが幾千もある、或は所謂盲者蛇に怖ぢずで、みす々々惡結果の來ることゝ定まりて居るに拘はらず、

亂暴狼籍の生活を營で居るものもある、これ即ち轉ぶまで鼻打つことを知らぬ天狗である、この天狗は取り捨でゝ云はぬが、天狗ならぬ臆病な人の社會には從來甚だつまらないこゞが澤山に行はれて居つた、而して、それは何故に行はれて居たのかと、穿鑿して見ると、多くは頑冥不靈の結果である、即ち天變や地異や或は人世に存する苦難災害などを見て、或は神佛の祟り、罰、罪科、譴責、或は天の憤怒など、解釋する古代の思想に驅られて漫りに怖れ、これを免れんが爲には、神佛の歡心を迎へるに若かずといふ樣な卑近の觀念を以て、依賴心

をのみ恣にして、何物かの冥助を得たがつて居たのだ、けれども不正直の首に神は宿らない、道無き道に天助の加はるべき筈も無い、こゝに於てか心中益穩靜ならず疑惑は愈疑惑を重ね、果ては恐怖になり憂苦になりて悶へ苦む、それで苟も救濟の能力がある、それに依れば憂苦を攘ふことが能きるとでも云ふものがあらば彼れは犬糞でも猫尿でも辞せずして拜むのだ、況して効驗灼然らしき方法でもありて、彼等の愚昧なる迷妄に投ずるなら、理否と邪正の辨別もなさで直に縋つて來るのだ、海に溺れた瀕死の人は萍でも、木片でも攫ぶ

に遑なく攫み附くのと仝じことだ、昔時から加持祈禱禁厭卜筮等の行はれたのは、即ちこの動機に基きてのことだ、心あるものより考へれば、加持、禁厭などに憑り托んで身心を安んじて居る如きは、愚にも亦憐むべきの至りだと思ひはすれど、智識の境遇が夫れ以上に達せぬのは、是非も無き次第だ、そこで彼等の多くは加持或は禁厭を無上の寶典として、甚しきは、これに依りて天意をも窺知し得べき方法として居たのだが、幸か不幸か近世は時勢風潮が變はりて、これが供給を爲すものも乏しくなりて來たし、縱し二三あるにしてからが、

云はゞ冷肴殘飯で、彼等の滿足を値ひする程のものは無くなつて來たのだ、それが爲に實はこの頑冥不靈の輩は由り所を失ふて曹然たるの狀態だと、

余輩は、そこで又云いたいのだ、愚人の濟度は、社會政策上、一の大要項で決して等閑に附しては置けぬ筈のものだ、又假初にも、この未開野蠻の思想が、社會の何れの部分にか、磅礴として存在して居る間は、これが救濟の道を講ぜずには居られぬ筈のものだ、所が救濟の道と云へば固より高等の宗教に寄らしむると云ふ策もあろうし、教育を施して、理性の發展を爲さしむると云ふ

策もあろうが、これらは皆遽に其効果の収め難いものであるさすれば如何樣の方策が果して適當な救濟の道であろうか試に考究して見ようなら、第一簡便なものでなければならぬ、次には無學なる俗人社會に普く行はれ得べき、又了解の爲し得らるべきものでなければならぬ、最後には一たび救濟を受けた上は、これを再びするの憂の無いことでなければならぬではないかさて窃に思ふて居るが、何物か最も適當な簡便な愚人濟度の捷徑があるであろうか、感應術を除きて他に勝りた方策があるか、蓋し感應術は是亦屢前述した如く、

加持や祈禱の眞相を知らしめて迷夢を醒まさせるし、又理由無き恐怖心などは立所に奪ひ去らしむるし、自强自信自重の念を起させるし、從つて社會に處するに大膽に活潑に獅子奮迅の勇氣を以てすと云ふことに爲らしむるではないか、社會が若し斯かる濟度の方法を要求して居るなら、即ちこれに對へて、余輩は感應術を推薦して其不備を補ひたいと思うのだ、これ其三だ、固より憂世の志士仁人等は、夙に耳を聳てゝ、これら所謂潜在的の要求を聽いて居るであろうし、又悟りて居るであろう、それと仝時に、これに處すべき方策の工夫

に心膽を碎いて居ることであろう、が併し、不幸にして余輩は未だ其方策の一をも聽かぬのだ、夫々專門家もあるからして亦其道に依りて賢き智略も出でんかなれと、譬喩にもある如く、黄金は山より出づるもの丶手にては造り能はぬとかで、この潜在的の要求を充たすものは、恐らくは、余輩の稱導する感應術が、それであるならんと信ずるのだ、當代焦眉の急を察して、余輩は殊更に意をこの点に灑ぐのだ、

第三章　感應術の原理

是れ容易に似て容易ならぬ説明だ、

感應術の原理を科學的に説明せんと思へば、勢ひ、高大なる哲學の力を藉らなければならぬ、心理學の細説に渉らねばならぬ、生理學を説かねばならぬ、無限絶對の存在者、最高超絶の大勢力、造物者、第一原因、天道、神、佛、天地の主、人間の支配者、人間が有する禍福の觀念、死生の觀念、苦樂の觀念、遇然、僥倖、因果の關係、靈魂、氣魂、精氣、靈魂の不滅、心靈と肉体との關係、良心など、少なくも、これだけの題目に就ては、まづ解決を下さなければならぬ、定義を立てなければならぬ、これが第一順序では、ある

し、唯だ順序ばかりでは無い、然かせねば議論錯雜して定義の要領を沒する虞があるのだ、が併し、この小册子では迚も斯かる深遠なる問題を細論することは能き無いのみならず、實は學術上、新派でも舊派でも二元論でも一元論でも唯心論でも、唯物論でも、或は平行論でも有神論でも無神論でも、不可思議論でも、それには關しないのだ、否關せぬことは無いが、暫らく、これを解釋の外に放置して置くも、差當り感應術の原理を説明するのに、必しも要用では無いからして、兎に角、事實に基づきたる一段の解説を試みることゝする、唯物論でも

唯心論でも、それは問はない、人の精神の機能を事實に依りて觀察すれば、其機能に高下の二級あることが認められる、高級精神機能とは、善惡、邪正、憎愛、好惡、美醜などに對する感覺、判斷及觀念或は義務、責任などの觀念、剛臆强弱の諸性、所謂自我に屬する諸般の現象の起因を指して總稱するので、即ち靈魂とも心靈とも、云ふのは、其体と性とに拘はらず、皆この部類に包含して居るのだ、下級精神機能とは、五官を透徹して知覺する低度の感覺、光線の色彩、音響の聲、或は飢に食を求め、渴に飲を呼ぶの類など、所謂動物性の知覺と慾求、即ち本能的

の作用を指して總稱するのだ、言ひ換へれば、一は心理的の機能、一は生理的の機能とでも云へる、

處が「スピノーザ」氏は、心理的機能と生理的機能とは一見異なりて居る樣に見へはすれど、これは異なる見地より見たる一体の兩面に過ぎないのだ、假令ば同一の圓の周邊でありながら、內面から見れば凹線で外面から見れば凸線と爲るのと同じ理だと曰はれたが、實にそれだ、さすれば、內外兩面の機能(高下二級の機能)として其兩端を互に比較して見れば大びなる懸隔がある樣に見ゆるなれど、事實が果して一体であるならんに

は、其兩面の接觸點即ち中央の連鎖點が無けねばなるまい、それなら其中央の連鎖點とは何物であろうか連銷點を說明するには精神機能の發育の狀態を說明するのが捷徑だ、即ち精神機能の發育は其程度萬人同樣でない、或者は高級の側に秀でゝ居る、又或者は下級の側に長じて居る、文野、賢不肖君子小人優劣の岐るゝ所以の原因はそれだ。而して高度の白痴瘋癲で無い限りは高級機能の全然缺如して居ると云ふものは無い、精神の畸形的發育とも云ふべき凶惡、殘酷、不仁などの惡德に富んで居る無賴の蠱兒でも、時に或は愛兒の情

に羈絆されたり俠者の義に感じたりなどして高級機能の片影を顯現はすことがある、況してや、これより數層程度の低き、精神の不完全なる敎育、即ち或は惡癖、或は弱点、或は薄志など云はゞ高級機能の一部分の不全に止まるまでのものだ、處が、人の精神には其中に具へ附けられてある向上的性質の生命とも本体とも云ふべき良心なるものがあるからして、それの麻痺せぬ限りは、常に進境を臨んで止まないのだ、即ち高級機能の存在と敎育とを意味する證據として、蓋し何人でも進境を望むのだ、けれども歙人孟軻さへ義を見て移る能

はず、不善改むる能はず、是れわが憂なり」と嘆じたるが如く、機能は完全になり難きものだ、して見れば俗流の世人は如何にして彼岸に行くべきやら、余輩の見解を以てするならこれら、進歩を希ふても到達せず善を見て移りも得せず、又不善を改めも爲し能はぬとは何事ぞや、必竟は、これ意志の能力の缺乏が原因では、あるまいか、即ち高級機能の不全は意志の不全發育とも云ひ得るこゝで、固よりこれを細かに解剖指摘するなら、或は智性の鈍きもあろうし或は情性の過敏もあろう、併しこれは補ふに方便もあるが單り意志

の不全發育は如何とも仕方が無いのだ而して意識を生ずるにも、意識を行爲に實現させるにも其本源は係りて、この意志にあるのだから、余輩はこれを推して意志即ち高級機能の主宰と目するのだ、否寧ろ適當なのは心理上の行政府と認め樣と思ふのだ、

意志WILLEは唯だ心理上の行政府とのみ云ふては無い、實は亦生理上の行政府とも認められる、それは生理上の機能、現象が意志の能力で左右せらるゝ一事實を見ても分曉る、即ち体心双關の理論で充分證明し得らるゝ如く、身体と心靈との相互の關係は、この意志に依り

て結び付けらるゝのだ、されば序を以て、生理的の機能現象が如何程にまで意志に關することの深きやを研究して見よう、希くは以下の適例で其一班を知れかしだ、

（一）世界第一を以て誇稱する大力無双の「サンダウ」といふ人は筋肉發育法に就て著書もあるし、又人にも訓へて著しく其筋肉を發育せしめて居る、この「サンダウ」の法に依ると、局部の筋肉を發育させんと思へば筋肉に規則正しき屈伸の運動を一定時間、連續して、繰り回へして爲さしめると全時に、それに勝りて、最大の

注意を其局部に加へ無ければ勞して効無しだとのこと、實驗上、成程、無意無心で唯筋肉のみ動かして斗り居たとて少しも目立つた發育はせぬ其發育させたいと思ふ筋肉に格段の注意を加へねばならぬと云ふは精確な事實だ、それで、これは既に世上に饒ねき實驗家のあることだこの注意を如ふると云ふことが、即ち意志の筋肉に關する所以を説明するの鍵だ、

（二）外科醫の室へ行きて手術を施す時の實際を見るのに、其性剛毅なる人（例令は軍人の陣中に於ける、劍客の仕合に於ける、俠客の出入に於ける時等の外傷）感

想全しき人(俗に云ふ無神經者)などは疼痛を感ずること少いゲナ縱し又剛毅で無いにせよ、意志を轉じて他に紛らすの方法をさへ知り得るならそれでも疼痛の感覺は薄らぐ、其上治療上の經過は極めて善良の成績で治癒することも甚迅速なりとは疑も無き事實なのだこれも亦意志の肉体に關する所以を説明するの鍵だ、

(三) 勝安房公が嘗てコレラ病に罹られし時何が偖激甚なる下痢症の事であるから上圊數十回に及んで衰弱又衰弱、殆んど死期に瀕した時、潤然自制して排便の念を押へ止めて其後の上圊を全く禁じたゲナ、それが爲めに遂に九死に一生を得てコレラ病は治した實例がある、而して實は斯かる實見者は勝公一人で無い、他に類例は幾人もある、これ即ち意志の能力は激甚なる腸粘膜の煽衝にさへ打ち克ちて生理的の變狀を起させ得ると云ふことの證據である、

(四) 「伊達者の薄衣風を引かず」と云ふ俚諺は事實でないか、信心の行者嚴冬に水垢離を取りても感冒に罹るものは稀である、これ亦意志の能力が皮膚の官能にさへ影響を與へて生理的變狀を起させる證據だ、

（五）意こゝにあらざれば見れども見へず、聽けども聽へず食へども其味を知らずとは、是亦意志と肉体との關係を説明するの鍵だ、

（一）嘗て獨逸に於て醫學生が、其傍にあり食餌包一片を取りて何心なく摘み食ひしたり、然るに傍人戯れて、其餌包は砒素を入れたる毒餌包なり狂犬を殺さん迚の準備なりと、曰ふをも待たで、即座に中毒症狀を發したといふ實例がある、これ醫學生だけに藥物の理を知り砒素の中毒症狀を知りて居る處から、其死の容体が全然砒素中毒と全様の現象を呈したとのことだ、知らぬが佛、素人なら斯かることには爲るまじきを、而して實は餌包の中には何物も含んでは居らぬのであつた、

（二）知覺過敏の女性を捕へて暗室の中へ放り込み、窓の孔より上膊だけを出させてこれを括約り、室外にてこの血管を切れこの動脈を傷ぶれと呼び罵る、而して輕く血管の存する部分を傷の付かざる限り小刀の刄尖にて切る眞似す、暫時して微温の石鹼水の點滴を此處に落すこと幾分、又室外にて多量の出血ありたる

が如くに言ひ囃して罵る、然かする時は室内の女性も
す始に蒼藍色を呈し次に斃死しをはる、其狀は宛から
現然多量の出血の爲に死んだと同じことになる、これ
も獨逸にて死刑の囚人に實見した事實談だ、
其他斯かる適例を索むるなら實に無數だ、が世人は上
記の事實を見て何と判斷するかだ、蓋し意志の作用が
其身体に及ぼす影響の大なることが、これで悟れるで
はないか、即ち意志の作用に依りて肉体が變化する、生
理的機能、現象に變狀を呈すると云ふことが了し得ら
れる、さすれば意志を生理上の行政府だと云ふのは誤

りであるまい、又實にそれであるのだ、即ち意志は心理
と生理との連鎖點で、内外兩面を具備へた全体の中心
點であるのだ、それゆへに完全に發達したる意志を具
へた人は、即ち人の中の人で亦完全に發達したる意志
は殆ど全能なのだ、以上は即ち意志の肉体に及ぼす影
響の理論と實例とを示したのであるが、次は、肉体から
意志へ及ぼす關係に就て少しく陳辯を試むる、
（この所以下意志と云はずして精神機能といふ字を
用ふ、こは其誤解及混乱を防がんが爲なり、精神と云
ふも意志と云ふも若し一言の辯を費さば其意義の

全樣なるを說明し易けれども、それは後章に讓りて、おのづから明かならしめん讀者諒せよ）

精神病者に藥石を服させて、其快癒を得るのも、常人に酒を飲せて醉はせるのも理は一トつだ、或は興奮と云ひ或は痲醉と云ふ、必竟其狀態の相異のみだ、藥瞑眩せされば其病癒へずで、即ち服用した藥品の成分の爲に精神機能に變狀を誘起するだけのことだ、處が服藥すれば如何にして其變狀を誘起し來るものであるか、多くの醫學者は萬口一聲に答へるであらう、即ち藥物が胃腸の粘膜若くは皮膚から吸收されて血中に入る、血

行に連れて循環する途すがら組織に化學的の變化を與へると、良し、藥品に依りては組織を化せずして通過するものがある、これは如何、これに答へては其藥物の成分、腦の神至中樞に達する時、其中樞を刺戟するなりと、敢て問はん、刺戟とは何ぞやだ、恐らくは刺戟と云ふことの以上に說明は爲し難からんだ、刺戟は即ち一種の秘密で、これに依りて精神の狀態も變はるし、亦肉体上、生理的機能、現象の變狀も起し來るのだ、余輩をして云はしむれば、此刺戟と仝時に反射的に意志に衝動を與へて心理的の側にも、生理的の側にも變狀を來させ

るだけの反應を起させるのだ、意志の能力で肉体の變狀を起させると云へば、或は疑ふ人もあらんが、藥物を服して精神の狀態を變化させると云ふことは從來其例溢るゝばかり多ければ、世人は毫も疑ふまい、而かも、この疑ふ餘地なき服藥の事實さへ、最後の刺戟と云ふことに就ては說明の辭は無いのである、秘密とするより他に方法が無いのである、余輩の云ふが如く、此刺戟から意志に衝動を與ふるものだと解釋者なければ理性の滿足は得られぬのである、さすれば肉体より精神に及ぼす關係と精神より肉体に及ぼす關係とは、方向

の互に反對して居るのみで要は同一である、

第一章に略陳述したる体心双關の理を參酌し、前記の事實を稽へなば、感應術の原理は瞭然として了解されるでは無いか、

即ち感應術の原理を約言すれば、心理的の行政府で又生理的の行政府たる人の肉体の作用と心靈の作用との中心たる、高級精神機能と下級精神機能との連鎖點たる意志に衝動を與へ其衝動に依りて、或は心靈にも或は肉体にも變狀變態を起させると云ふのである、この意志に衝動を與へる方法が余輩の稱導する感應術

なのだ、

或人の曰くには、成程其原理は了解したが、如何にして意志に衝動を與ふることが能きるか、或は藥物を服して刺戟を與ふるならんには、縱令其蘊奥に於て秘密、不可思議に屬するありとも、亦合點の行くべき途なしとはせぬ、けれども人の心意には智の動くもあり、又情の感ずるもある、然るに複雜限り無き心現象の中より單に意志をのみ抽出し、これにのみ衝動を與ふるとは云ふて行はれざるの難事では無いかと、余輩は、この疑問に接して、これが答を爲すに先だち反問したいことが

ある即ち心靈に對する意志の作用(高級精神機能)でも、肉体に對する意志の作用(下級精神作用)でも、其作用の熾烈なる人、換言すれば意志能力の强き人は、如何にして其能力を强からしめ得るかた、如何にして其能力を發育させるかた、其發育は智識を透過して來るのか、知識に伴ふて來るのか、されば智識のあるものは、皆意志は强ひか、高級精神機能は完全なるか、そうではあるまい或は感情を經て來るのか、感情に伴ふて來るのか、されば大は詩人、小は女性は意志が强いか、高級精神機能は完全だか、そうではあるまい、勿論智識感情は毫も關

係せぬとは云はないが、意志は獨立して發育し、獨立して作用を爲す場合が極めて多いのは事實である、感情の痴鈍な人にも、智識の淺薄な人にも意志の能力の强い人は澤山ある、斯の如く獨立の發育と作用とを爲し得る意志、それなれば、これに對して衝動を與へられぬと云ふ理はあるまい、否實に其方法があるのだ、今其方法を說明する準備として、試に從來の意志發育法を考へて見たいのだ、

從來の意志發達は自練自修といふことのみに依りて得たこゝらしく思はれるが、それは僻見であろうか、蓋

し古來の英傑賢哲の跡について調べて見ると其時勢の風潮或は境遇で多少方法は異りて居れど、大抵は山間に這入りて獨居を營んだとか或は海邊で栖居したとか、或は名山の麓、大川の邊に於て生活したとかだ、名山大川英雄を生ずと云ふ古諺の如く、巍々たる山岳は崇敬の念を養生するし、滢々として流るゝ水は快濶の襟度を養生する、洋々たる海の水に宏量を學び、突屹たる峻坂に險阻を忍ぶの英氣を受くるのだ、或は市井の陋巷に居つて練修するは、所謂逆境は人を玉成すると云ふ其理で行くのだ、患難は忍耐を生じ、忍耐は希望を

生じ希望は恥辱を來らせずと云ふのだ、さて以上の事實は何れも天地山川或は境遇よりして、高大なる感化を受けしめるの道だ、感化を受くるとは、卽ち意志を衝動し、意志の能力を强めると云ふのと同じことだ、英雄賢哲を見る毎に、人の多くは、彼は天稟なりなどゝ云ひたがるが、天稟とは唯其感化を享受するに適當なる性質を他に勝りて多く具備へて居ると云ふだけのことで、意志の發育は感化の道に依るより外は無いのである、釋迦牟尼は意志最强の人であつた焉んぞ知らん彼れは病老死苦の人に遇ふて同情の涙を濺がれた當時、

既に高大なる天地の秘機を受けて感化されたのだ、孔夫子は意志最强の人であつた、迅雷風烈に襟を正ふすと云はれた言葉を以てしても、天の感化を太だ多く受けて居られたことが了解る、耶蘇、「ソクラテース」、「孟子」、「プラトーン」、さては古來大人と稱された人等は必らず何れかの點よりして天の感化を受けて居るのである、感化無しに意志の强い人は決して一人もあること無しだ、

處が余輩は、勿論この感化の道、この意志發育の方法を秋毫といへども非議するのでない、が併しこの方法は

第一不容易で普通には行はれ難い、殊に現今の時勢では却々の難策と云はねばならぬ、若し余輩の稱導する感應術で直接意志に衝動を與へて、この感化と同樣の事が能きたなら、縱し其効はこれらに及ばざること遠くとも、有は無に勝るの道理で、甚しき効益である、されは如何にして其意志のみを抽出して衝動し得らるゝかと云へは、卽催眠術を應用してまづ隨意筋の動作を靜止せしめ、次に下級精神機能及び高級精神機能の幾部分を休止せしめ意志をのみ休止せしめずに存置するのだ、而して意志は其衝動に應じて觀念を起すたび

毎に其所要の智性の部分に急突の聯合を爲すことが能きるのだ換言すれは設假的睡眠に陷らしめて、暫時く無我(俗語なれとも)の人とする、而して其人の意志のみを抽出して衝動するのである、斯の如き場合で衝動したこと及衝動することは他の機能の混感を受けぬが故に其所謂感化の能力、非常に强大にて寧ろ猛烈の作用を起すものである、又其感化に要する時間も甚だ僅少の時間で足りるし、感化力の保持する時間は、これに反して太だ永く繼續するのである、其理は恰も空中に一物を擲つとき、若し空氣及地球引力と云ふ障害物

さへ無かつたなら、僅少の勢力で能く遠きへ行ることが能き、而して其勢力が永時間保續するのと全じだ、

第四章　感應術と感應療法

感應術が人物の養成にも、社會の教育にも、風教にも、軍事にも、商事にも、汎き効益あること、即ち利益は極めて多方面なることは屢陳辯した、が併し、余輩は醫生の身だ、今其天職として、こゝに一章を載して、特にこの感應術が如何なる程度にまで、疾病の治療に應用が能きるか、或はこれを應用して幾干の効果が得らるゝかに就

最モ通常行フ方法ニシテ時計ノ龍頭ヲ注視セシムル狀態

て研究して見なければなるまいと思ふのだ、處で余輩は、之れを論ずるに先だちて、醫術的治療と云ふことの根本から論じて見たいと思ふし、又目今專ら行はれて居る醫術的療法に少しく批評を試みたいと思ふのだ、何となれば、今や泰西の哲學者間では、醫術的治療に關して其眞價幾干ぞとの問題が甚だ熾盛なので、甲論乙駁、隨分賑かなことだ、殊に甚だしきは米國では神癒派と稱する宗教的治療法を以て寧ろ醫術に勝れりと爲すものすらあるのだから、捨て置くことは出來ない、試に輓近泰西の新聞紙に散見する處を見ようなら、所謂

神癒派は醫藥の服用を一切禁じて唯信仰一篇で、人の疾病は治し得べきものだと論じて居るし、亦之れを實行して居るのだ而して其學說理論としては、即ち体心双關の理を主張して居る、この体心双關の理は心理學上の卓說であるだけに、其學界の泰斗と云はるゝ人達で尙この派に贊成して居るものが澤山ある樣だ、其中で有名の人を擧げるなら、「ハーバード」大學の敎授「ゼームス」博士、この人は、信仰的治療は確固たる科學的根據を有するは勿論、其治療の効績の顯著なるは醫學の比にあらざれば、縱令一方には怖るべき危險の憂ありと

も、寧ろ之れを默許奬勵して醫學の企て及ばざる効果を奏せしむるに若かじ云々」とまで言ふて居る、又「クラーク」大學の校長「スタンレー、ホール」博士は「佛國には心理的作用に依りて、疣を治せし者ありしことは、汝等之れを知らん、果して然らば其他の疾病を治し得ることを蓋し疑ひなけん云々」と言ふて居る、其他「エール」大學の敎授「ゼームス」博士も熱心な贊成者だ、こんな工合で堂々たる學者の贊成者は却々澤山ある、彼の迷妄者流の囈言と同一視することは能き無いではないか、

さて、余輩は前にも云ふ如く醫生である、淺學であるけ

れとも亦多少の專巧はなきにあらずだ、醫術の價値如何は、強ちこれ等神癒派の人の云ふ如きものでは無いと信じて居る、又實際學術の位置から觀察しても、醫學は諸般の學術中で高位置にあり得べきもの、燦然光華を放ち得べきものだと云ふことを知つて居る、醫學を辯護する點に於ては決して退けを取らぬ覺悟だが神癒派は他山の石だ、自ら省みて公平な判斷を維持し、知るを知るとし、知らざるを知らずとするの襟度を具へて徐に研究して見よう、漫りに庇護し辯解し頑强狹隘一點張りで獨りよがりをするのが、學者の能事では無ひ、

猛省一番抑も今の醫學は果して完全であろうか、治療の根本は何處にあるかと考へて見たい、

余輩は常に信じて居た、亦今も信じて居る、即ち今の醫術は頗る科學的であると、而して一疾一病の微といへども其理の研窮は屆いて居る、病的變化の狀態の推敲は充分であると、けれども其實際の治績に到りては如何である、試に其疾病の種類を問はず患者千人を集めてこれにある限りの今の醫術を應用して治療をすると想像せよ然る時に其中で全治する者の比例は、どれ程であらうか、成程臨床家の成績表に依ると、腸チフス

は八〇%、コレラの窒息期は八〇%、ペストは五〇乃至六〇%、回歸熱は九二%、肺炎は六七乃至八〇%、百日咳は八五乃至九五%、猩紅熱は七四%、天然痘は(種痘なくして)六九%の快癒を得ると、記してあるから甚だ有効卓絶の樣に考へられるが、實は其中の最大多數最大部分は自然療能に依りてこの成績が得らるゝのだ、さしてあれば實際の醫療のみでは恐らくは、其率例の意外に僅小なのに喫驚三嘆するばかりであらう、其上今の醫學は科學的なりと頻りに誇稱して居る所を見れば何人にも其理と其道とを推して行ひさへすれば醫者

は誰でも効績は全樣に擧げ得らるゝ筈であるのに、實際は然うで無い、治療に關しては、醫者其人の人格(ペルセーンリロカイト)を利用することが甚だ多くて、否多い位ではない人格の利用で治療するのが寧ろ十中の七八を占めて居る位であるのだ、尙も甚しいのは人格どころではない、權門を衒ふ家屋の外觀を利用して治療をする奴輩がある位では無いか、其他細かに觀察するなら雜多の方便を利用して所謂患者の信仰を奬誘するに之れ努めて居る小心翼々たる狀態は實に憐むべき程であるが、元來何の爲めに斯くはするのであるか、患者の信仰を買はん

とすること即ち人格の利用、家屋の權門を圖るのは何故であるかこれを分析して云へば實は一種の精神的療能を施さんとするの策で自然療能的のものなのだ、即ち精神的作用を術ふ所以なのだ、精神作用とは今や余輩の唱導する感應療法の一端なので、今の醫術的治療から此一種の感應療法(即ち精神作用)を用ふること を全然禁じたなら、さなきだに僅少なる治績の率例が如何に減ずるかも計り知れないのだ、そこで遡りて論じて見たいことがある由來今の醫學は疾病の治療と云ふことを主要第一の目的にして居るのか、將又終節

として居るのかが問題だ、古昔は人生自然の要求から治療と云ふことが醫學の初頭に立つて居たのは事實だが、今ではそうで無いようである、現に當時醫者の爲しつゝある處を目擊すれば如何な順序で事を爲すかだ、まづ見よ、病人がありて醫に治を乞ふ、すると醫は一診してこれに藥方を處するのだ、處方、何々右一日何回服用、これで治療は終はりたもの〻如くに行つて居るが併し醫術を行ふもの〻責任は其樣なことで可いのであろうか、醫たるもの〻目的が若し治療と云ふことであるのなら、余輩の主張する感應術は實に醫術の上乘

なるものと云うことが出來るので、人生必至の要求にも應じて居る譯柄なのだ、が併しそれは二段にゆづるとして、こゝには先決を要する緊急問題がある、からして、それを論じよう、

さてその緊急問題とは外のことでない、即ち治療法と云ふことの原理なのだ、言ひ換へて、一例を擧げて見れば、藥物の應用は何を目的として居るのかと云ふことだ、固より内科の療法と云ふのは生理機能が目的であるは言を待たぬし又疾病と云ふのは、其の生活機能に附隨した要求と動作との相應せぬ場合に起るものであるから其不相應を癒やして平衡を得せしむると云ふことが蓋し療法の極意でないかして見れば全体生活せる有機体の機能の上に斯の如き作用をなし得ると云ふのは何であるか、先の説明さへ得られたなら、療法の原理は自から判かるのだ、余輩はそこで云ひたい、即ち原理(療法の學術的極意)は只一ッの刺戟と云ふことなのであると、抑も刺戟を離れては如何なる療法でも之れを説明し得るの途がないのみならず、究竟刺戟といふこと以外には學術上の據り處は無いでは無いか刺戟の種類を數へれば器械的刺戟もあろうし

溫熱的刺戟もあらうし、化學的刺戟もあらうし、視學的刺戟もあらうが、孰れにしても理は一とつだ、藥物で治療するのは化學的刺戟だが、一には何故に、一には如何にしてこの刺戟が治療の効を奏するかだ、人は一口に刺戟すれば疾病は治すると云ふが、刺戟すれば何故に治するかだ、恐らくは何人もそれ以上に確實な説明を與へるものはあるまいと思ふ、余輩も亦刺戟と云ふ事の以上は造化の秘密だと説くのが適當であると信じては居るが假りに一言の辭を挿むなら「其刺戟により て一種の觀念を起すと同樣の作用を生じ而して生理

的の變狀變態を誘致するのだと云ふことが出來る、若しこの議論にして誤謬の無いことなら恰度精神療法と云ふのが即ち觀念に因りて生理的の變狀變態を誘致し得ちるゝ如く、又余輩の感應療法が即ち觀念が基礎で生理的變狀變態を自由に誘致し得らるゝが如きと同じことだ、

約して一言するなら醫學者が醫術として尊敬して居る諸種の療法は遂に刺戟と云ふことの一點だけに其理を收めて仕舞ふのだ、して見れば刺戟も精神療法も感應療法もこれ同根生ではあるまいか、

以下今の醫術に就て細評を試みることにする、

(一) 藥物療法、用法は內服と外用とを問はないのだ、要は主成分の皮膚若くは粘膜から吸收されて血管を傳ひ組織を過ぐる道すがら、觸るゝ局所に化學的の變化を起させるか或は主成分が腦の神經中樞に達して刺戟を企るかゞ治病の奏効の原因だといふことだ、之れ乃ち醫學界の定論ではないか、

(二) 手術的療法、これは只理學的原理の應用に過ぎないのだ刀刃を奮ひ巨鑿を用ゐて生理的常規以外の變態若くは變質の部分を復舊し除却する迄のことだ、

而して手術後の成績如何に就ては防腐の法或は速癒催進の道がないことはいはぬが、其大勢は一に自然に待つのみのことだ、

(三) 空氣療法及轉地療法空氣の清濁と其壓力の高低とが呼吸器病に影響するのは尙水の清濁と硬軟が腸胃病に影響するのと同じだ、空氣療法とは、乃ち不良の場所を避けて適良の所に行く迄のこと、轉地療法も亦夫れ讀で字の如しだ、脚氣「マラリヤ」「レウマチス」其他の地方病など其病毒の雲生霧散の圈內を逃れ出でゝ病毒の浸害を避けるのが主意だ、

（四）海水浴療法及び溫泉療法、海水或は溫泉の內に、含有して居る成分の刺戟を利用すると同時に一は波濤の運動のために皮膚を洗ばれたり、身体を動搖せしめられたりして、血行增進の機を計るのだ、一には海邊或は山間と云へば空氣も自ら刷新し易くて轉地の効も併用し得られる譯だ、殊には優りて精神の快感を感受し得るではないか、

（五）電氣療法、電氣を疾病に應用して固有の効驗ありとは余輩は信じないのだ若し多少でもこれありとするなら要するに然かく感じた迄のことだ、乃はち精神的作用に外ならんのだ、

（六）日光療法、余輩はこれあるを聞て未だこれが實驗を知らないが併し、要するに太陽の、光線と熱線とを適度に利用する迄だ、

（七）按摩療法、筋肉を打叩し摩擦して血行を旺盛ならしめたり新陳代謝の機能を增進したりするのが主眼だ、

以上の諸種の療法に就て余輩は抽出再論の已を得ざるものがあるのだ、乃ち藥物療法に就て其投藥者若くは處方者を信ずると否さが奏効の結果に如何ばかり

關係するかを考へて見たいのだ、藪醫毒庵が人參眞珠を盛るよりは名醫の甘草一片が能く効くとは古來の實驗ではないか、手術治療法に就てもそれだ被治者の精神的狀態の如何に因て結果に影響を及ぼすことの多きは事實だ、余輩の實驗を以てしても其例は澤山ある、乃ち曾て腹壁切開術を十數回試みたが親戚朋友に警戒を加へて置くは勿論なれど、被治者に向て其豫後の詳細を知らしめて、たゞに疑懼心を起させると其結果は必ず好くない、これ等皆精神的作用の一證で、乃ち一種の感應術を應用して居るのと同じ事に當る、空氣

轉地、海水浴、溫泉、電氣などの諸療法が名こそ夫れなれ實は精神療法の變態とも云ふべきは已に陳述した、日光療法と云へば余輩は其詳細を知らねども、一例として稽査すべき一二の事實をのみ知て居る、「ペスト」の毒は日光に晒されて消滅する、或は曾て漢醫が横行した時代に痘瘡には寢具衣服さては日常の小道具に至る迄も專ら赤色のものを撰て用ゐさせた、而かも其當時は何故に而かするかは知らないのだ、醫者も知らず看護者も知らず患者も知らず漠然禁厭と稱したり痘瘡神への犧牲なりと稱したりして只濫りに行ふて

居たのだ、而るに事實はそうでない、焉んぞ知らんやだ、禁厭にもあらず犧牲にもあらずして赤色の光線が痘毒撲滅に大効を與へるのであつたゲナ、輓近此說が唱道されて我人共に啞然たりだ日光療法とは斯かることはあるまいか、

（八）鍼治及灸治、余輩は鍼治と灸治とを醫術の一端に加へることの適否を知らないのだ、或はこれ一種の感應術かと信じて居る、他はこれを目して神經の刺戟だと云ふゲナ、が併し、其刺戟の性質は自ら異る點があると思ふ、彼の藥物を用るが如き類でないのは勿論だ、

体内に異狀の分子を注入するでもない組織に化學的の變化を起させるでもない、只一定したる局所に一鍼を下して時に奇効を奏させ得るのだ、奇怪の現象と云はねばなるまい、余輩の知人某が嘗て浪花の鍼醫と戯れた實話がある、それは鍼醫に試に奇驗を示せよと强求したのだ、スルト鍼醫は然らば汝の春情を三日の間停止せしむべきかと論ふて、果して知人は鍼醫のなすがまゝに任かせる事となつた、鍼醫は其人の右側股關節の上部に一鍼を下したが不思議なるかな、其后三日間寔に春情其意に添はなかつたと云ふことだ、由來鍼

治者のなす處其鍼を下す處皆一定して居るのだ、而かも之れ多くは解剖學上生理學上に確固たる根據のあるではない、只熟練巧妙の技術を經て能く効を奏し得るのだ、鍼治の學説に就て其系統を尋て見ると、易の八卦を畫するが如く性の九星を宿すが如く、古代の支那哲學に基た天地陽陰の配合に因て、其局所が制定されてあるよふだ、乃ち之れ又別種の感應術とでも名けねば他に適當の解説はないかと思はれる、灸治に對する理論は之れと大同小異だ、只其方法に於て鍼と灸火との相違がある斗りだ、

要するに諸般の醫術的療法には必らず精神的療法を包含して居る、鍼灸治の所謂感應術たるは問ふまでもない、極言すれば醫術的療法も大部分は精神的療法を含有するものと認むるも不可はあるまい、扨て醫術的療法が果して精神的療法の援助を籍らねばならぬものとすれば其精神的療法と余輩の唱導する感應療法との徑庭幾干なるかを豫め知れかしだ、さすれば必らず感應術の尊貴すべき所以が自ら知れるであろふ、醫術的療法は肉体よりして精神機能の變狀を起こさせるのではないか、感應療法は感應術を以て精神(意志)よ

りして肉体に變狀を呈せしむるのでないか、若し醫學的に感應療法を説明するなら、乃ち最も勝れる精神療法といふべきであろふ、精神療法が最廣き應用の範圍を有して居て殆と總ての疾病に有効なるが如く、感應療法も亦有効なのだ、只催眠術を籍り用て行ふ感應術には睡眠に故障ある患者のみ聊か適切ならずと思はるゝが欠點だ、希くは神癒派の所論と混同すること勿れだ、余輩は固より醫術的治療の眞價を知ッている、故に神癒派の如く一切の服藥を禁せよなどゝは言はぬ、假令へば感冒の患者に對して、よし其頭痛其惡寒其熱

發其咳嗽を感應術で確かに治し得るとするも、之れに勝りて容易く且確實なる療法は「アンナピリン」の適量を投ずるのだと信じて居る、夫れで余輩の主張は感應療法は只醫術の効果及び難きもののみに施して見たいのだ、蓋し夫れが當然の理であると思ふのだ、

第五章　感應術類似の諸術及これに對する批評

理解をすれば、感應術は、神變不思議でも、何でも無い、科學的の動作で、作用で、秘術とは云はれぬ筈のものだが

併し、聊か超然たる趣味があるからして、俗人はこれを見聞して驚くのだ、世の中には、似て非なるものと、似ずして同じきものとのあるのは勿論だが、古昔から行はれて來た、禁厭、魔法など云ふものは尙この感應術の如くに、科學的の根據を有して居るものであろうか、成程外見には似て居る處もある、が亦似て居らぬ處もあるからして、内容と原理とに就て、少しく批評を試みて置くのは萬更無益ではあるまいと思ふのだ、總じて古今在來の下等宗教には、必副生物として、所謂秘術然たるものが行はれて居る樣だ、即ち呪咀、禁厭、加持、祈禱の類

がそれだ、而してこれらの諸術は、何時の世から行はれ初めたか、其起原は調らべて居らぬから余輩は知らない、又其諸術は確實なる教典的の根據を有して居るものか、或は出鱈目の所行が、其俑を作りて、遂に今日に迨んだのだか、それも知らない、勿論窃に信じて居るのは、それが出鱈目說であるだろうとの意見だが其道の人に云はしむれば途方も無いことを放言するからして余輩は、暫らく其鋭鋒を避けて斯く言ふておくのだ、まず以下列叙する批評を一讀すれば、噴飯しながら其眞相が分曉て來ると思ふ、

（一）禁厭　禁厭とは俗に所謂「まじなる」のことだ、抑も禁厭は如何なればこそ斯くまでに廣く普く行はれ及んだのであろうか、昔時は學者も不學者も賢人も愚人も皆尊んで用ゐたものじゃゲナ、今も尚を田舍の傖父は問ふも愚、都門での錚々たる人達まで盛に信用して居るのは疑も無き事實で無いか、處が禁厭には實はこれを區別して見ると其中に二ッの種類がある樣だ、即ち一は凡て疾病治療の目的に供へられたもので萬病殆んど悉くそれに應じた禁厭の法のあらざるはなしと云ふ樣な狀態であるし、又他の一は人生凡百の出

來事に應じて用ひ得られる樣に種々の法が出來て居ると思はれる、まづ人事に關する禁厭の例から臚列を試みることにする、

盜難除け、極月八日の納め餅を搗く時に餅のこり粉を以て家の裏口表口に手掌の形を印する時は盜賊忍び入らずとは昔よりの仕來りだ、火難除け、前年の冬の土用の丑の日の早朝の初汲の水を翌年の夏の土用の丑の日に家の棟に灌ぎかけるときは火難を受けずとは皆人の知る處だ、

蟲除け、「千早やふる卯月八日は吉日よ神さげ虫をせ

いはいぞする」と云ふ三十一文字を卯月八日の甘茶にて摩りたる墨で認めて家の戸柱椽端などに貼り附け置けば蛇を初め蟻などの小虫に至るまで一切近寄らぬそうだ、

余輩は潛かに之れ等の禁厭の施してある家數軒を尋ねて調べて見たが其効のある家もあり又なき家もありで、之れは畢竟之れを行なふ其家の主人主婦等の意志如何に關する事の如くに思はれる、迷心を一途にして行て居る所では効のあるのは確らしく又行ひこそすれ其心冷淡不信仰の輩には其効絶無の場合もある

樣だ、して見れば之れ即ち其勢力の蟲魚に及ぼせる底の感應術として解釋すべきではないか、

次ぎには治病的禁厭の例だ、

古昔、正曆三年源頼光瘧と云ふ疾病を患ひて惱んだゲナ、其際、時の大儒、舟橋大納言これを聞き及んで、杜子美の詩の一節

子璋髑髏血模糊、手擲捉還崔大夫、

と云ふたけを上抄して、これを恭しく、頼光に訓ふる樣、この字を白紙に書し、清水にて服用あらば、瘧、立所に愈らんと勸めたそうだ、而して頼光は聞くが儘に行ふて

病癒へたと、言ひ傳へられてある、今も尙截瘧の黑札といふ禁厭的のお札がありて往々行はれて居るが、それは、この詩句を白紙の全面に幾回と無く書き重ねて、宛から摩墨で塗抹した程にしたものであるそうな、何は兎もあれ、理も非も無いことだ、抑もこの詩句に何の意味が含まれて居るのか、成程字義から推せば愴然たる意は、あるかも知れぬ、又何と無く物寂しく冥界に通じもすべき感慨を生じもせんかなれど、實は無意義で字句上の機能などは、あり得べき筈が無いでは無いか、然るにこれを服して賴光公の病癒へたりと云はゞ、即ち

神經作用と解釋するより他には說明の法はあるまい神經作用と云へば云ふものゝ、この詩句を服させると云ふが、即ち方法で、この方法を藉りて感應療法を與へたと云ふのが實は正當の解釋なのだ、

又面白き實事談がある、嘗て京都に齡六十に近き老婆がありて、一種の禁厭に妙を得て居たゲナ、都市近鄉の間に其名隱れ無く知れ渡りて日々其術を受けんとて集まるもの多く門前甚だ榮へたそうだ、其老婆の禁厭は日中の糜爛を癒やすのが專門で、行ふ所の方法は、其患者の口邊に三度斗り自己が呼氣を吹き懸けるので、

同時に何か口中で呪文を低唱して後「チンアブラムシ、ウンケンソワカ」と是亦三唱するゲナ、然るに或時被術者の一人が詰りて、由來、禁厭には「チンアビラ、ウンケンソワカ」と云ふ呪文はありと聞けど、未だ油虫ウンケンのあるをは聞かぬ、これは間違いではあらぬかと、云ふたゲナ、この老婆固より無學無智何をか知るべきだ、不圖成程と合點して以來、油虫を疑ひ出しアビラウンケンに改正しては見たが、この以來糜爛の禁厭がトンと奏効なく爲つたといふ事だ、三十年來の永き間、施す毎に効のありたものが、一朝只呪文の疑の爲に効忽然と

して、消へ行くとは、奇といへども事實なのだ、必竟これ從來の感應力が、疑の爲に消失した證據ではあるまいか、

譚は、まだある、これは余輩の自から企てた實驗だ、殊に屢々實行して屢奏効し、今は百發百中の禁厭だ、尚更可笑しいは、この禁厭は余輩の新發明で從つて都度々々に方法も變はる、所謂眞正純粹の出鱈目法なのだ、それにも拘はらず効百中を過たずとは滑稽にも亦奇妙では無いか、即ちそれは齲齒に惱めるものを即治するの秘法なのだ、方法は古來ありふれたる禁厭に頗ふる似

通ひしことを、何を撰ばず襲用するのだ、施し得らるべき患者としては婦人か或は迷信的の人を限るのだ、そして出鱈目法施行の後、最早齒痛は止みたりと宣言するだけで足りるのだ、驚く勿れ、必竟はこれが禁厭の神髓である、蓋し古來傳說の禁厭は、其數千百位のことでは無いけれども其施行の實態をよく觀察して、これを分類して見ると、要は只二點のみだ、即ち一は術者が豫じめ被術者の信仰心を發奮誘起させ置きたる後に、其信仰心を利用して被術者の意志に感應を與へるのだ、そしてこの感應に依りて所要の機能を起させて變狀

變態を發現させるのだ、又一は術者が自から術者を信じて、自己の意志を一所に集注して、この集注した勢力で變狀變態を發現させるのだ、即ち其兩者孰れでも必竟實は感應術に屬すべきもので其圈を漏れぬのだ、唯余輩の主張と異なる處は、其方法が學術的なのと否らざるとの點だけだ、

（二）　呪咀、呪咀とは他人を咀ひ殺すと云ふことなの乎、少くも其身体の一部分に機能の障害を起させるべく祈願することであろう、古昔未開蒙昧の時代には却々盛に行はれたといふことだ今の世に斯かる無稽の

嘆言を吐くものも無かろうし、又信ずるものもあるまい、が併し、若し有りと云ふのなら少しく解説しておかう、これも前章に講じた如く、元來人は意志の能力で自殺し得るものだ、それから又自己の意志を其衝動と共に他の意志に傳達することも能き得るものだ、余輩の主張する感應術を應用するなら、これ決して難事では無い、さすれば、古來言ひ傳へられた呪詛の法、調伏の術の如きは、なんでも無いことで、全然拒絶することの能きぬもの、且は頭から不道理と斷言して仕舞ふ譯ケに行かぬのだ、唯其方法が餘りに迂遠で學術の光明に

遠かることが甚しいから、云はゞ面倒臭くて一笑に附し去るまでのことだ、試みに古來行はれた法の二三を擧げて見よふなら、三才の童子も能く曉知って居る丑の時參りなどそれだ、乃ち頭には三本蠟燭を頂き胸には八寸の鏡を掛け身には白衣を着け手には金鎚と五寸釘を携へ所謂丑滿の眞夜中をトして徒足のまゝで自己の志す神殿若くは山林の立木を目懸けて行くのだ、立木は呪はるゝ人の身体、釘打つ場所は其人の身体の何れかの場所なのだ、一心の祈願を込めて此釘を打ては釘に相當したる身体の部分から腐り初めて遂

には死ぬると云ふのが言ひ傳へた、立木と人と何の關する所があるか、木に打つ釘が人に傷ける筈はないのだ、併しそれが乃はち感應術なので之れを學理上から云へば夜間の寂寞を破りて狂奔するといふ程の意志の作用がつまり其結果を呼び來たすのだ、又足止めの法と稱して人の形を書て之れに其當人の生年月を認め足の部分に縫針を刺して家の大黒柱に倒に鈎るして置けば逃走者などは足に疼痛を感じて歩行が出來ぬといふことだ、又三毒調伏術と云ふのがある、それは蛞蝓と蛙と蛇とを共に炒鍋に投じ之れを密閉して

炭火の上で炒り上げる、そして其時に流れて出た蟲の油で呪はんとする人の形を畫き之れを祈ることだそふだ、又六蓄調伏術と云ふのもあるが其仕掛が仰々しい斗りで要領は大同小異だゲナ、何れにしても學術的のものではないがその結果は多少有たかの如くに古昔は信じられて居たのだ、

（三）加持、祈禱、加持とは、祈禱とは、おのづから區別がある、殊に祈禱が若し獨語の「ゲベーテ」と云ふ意味なら如何にも高大の義を其中に含ませて論じなければならぬが、て少に云ふのはそうで無い、俗間に所謂「で祈禱」

のをだ、さすれば加持も祈禱も同じもので、まづ以てつまらないものだと云ふことを前提に置いて差支は無い、が併し、其方法が知らず識らず尤も多く余輩の感應術の原理に近似して居るのは是であるから強ち注意の外へ打ち捨てる譯ケにも行かぬのだ、さて加持と祈禱には其方法は幾千百の種類があるか數へきれぬ程だ、けれども其中に一貫した規則がある、即ち第一、一定の式典を設けて人心を靜肅ならしむるが如く、莊嚴ならしむるが如くするのだ、これ既に精神の一端を轉動させて、後の衝動に具へんとての爲だ、第二には必一定

の注視點が具へてある、假令は鏡、或は幣、或は燃光、或は神佛の像、或は護摩壇などとこれに利用するが目的なのだ、これは或は視官からでも聽官からでも手當り次第、其被祈禱者の一官を疲勞させ、一律にさせ、以て下級精神機能を休止せしむる爲の準備なのだ、第三には必らず五官に對して異樣の刺戟を與ふる樣に具へてある、即ち或は異種異薫の香を焚く、或は寂々爲たる悽然たる音の發する鈴を振る、或は室内を冷かにしたり薄暗くしたり宛から魔界の門口らしき体裁にする、これら皆俗流の覇氣を止むる法で意志の衝動を助成するの

道なのだ、以上がこれで祈禱の根本的實態だ、そこで云ひたいのは、斯の如くして爲す所の加持祈禱、たとひ幾千卷の經陀羅尼を讀誦するにせよ、讀經が効ありとは、元來學術的に根據の無いことだとして見れば、これを一種の感應術として解釋する方が大捷徑では無いか、即ち特種の式典と、五官に與ふる異樣の刺戟とに依りて、俗氣を轉ぜさせて、そこへ注視すべき點を示して意志を一所に集める、さすれば、おのづから精神の下級機能は休止若くは減弱して來る、其虛に乘じて直接意志に衝動を與へ、夫から刺戟を起させ生理的の變狀變態

を發現させるのだ、其順序は余輩の主張する感應術と大同小異で唯異なるのは、わが感應術は睡眠を藉りて下級機能を休止せしたけのことだ換言せば、加持祈禱は迷神を利用して精神を恍惚の境に誘ふであるし、余輩の感應術は術者より被術者の意志に直接に感應させるのだ、それゆへに加持祈禱は必竟被術者それ自身に知らず識らず自己の意志で自己の意志の能力を奮起させることになるのだ、さてこそ加持祈禱は即ち其方法に能力があるので、目的として居る御本尊の神佛には何の關する所も無いといふことが判るであろう、

古來これを法力佛力など云ふは有理な譯ケだ、所謂「鰯の頭も信心からで」拜めば効は天降りて來る道理であるのだ、さすれば加持も祈禱も實は感應術の範圍にあるべきは瞭然たりだ、今更繰り返へすには及ばぬ、唯余輩の學術的なるに對して非學術的なるは禁厭のそれの如しだ、

若しそれとりわけて加持と云ふことを詳細に吟味して云ふて見よふなら加特は祈禱に加ふるに按摩を以てすると云ふのが尤も適當だ、祈りながらに珠數或は手づからで病人の身体を摩で擦るは物質の補助を藉

りて施こす感應術の一種とも云へる、必竟加持と云へは疾病の治療にのみ限りて用ゐられた方法なのだ、禁厭にもせよ、呪詛にもせよ、加持祈禱にもせよ、余輩に學術的の解說をさせれば前述の如しだ、固より宗教の庇蔭を蒙むるべき要用も無い、神佛の御名を藉り用ふるにも及ばぬ、けれども古昔行はれ初めた時代には、學術今の如く開けても居らず、宗教上の見解も進んで居らず、唯恐怖心と依賴心と驚嘆心との發達に伴へる神佛の觀念を主として、人心の中に往來させて居るのみで、奇怪は直に神佛の事と、思ひ、災害は天魔の憤怒とし

て、一に不可思議、二に神變だ、判り難いことは何でも歟でも理性の外へ驅逐して仕舞ふて考究することをしないが常習だ、さるからに又一方には時の思索家、學者などは、多くは神官僧侶の門に輩出したのだから、假令ば一理一法の發見ある毎に、其義の宗教に關して居らぬことでも、これを宗教の裡に加へて仕舞ふて、世人の無智無學に乘じて、これを遂行したのだ、曲學阿世は千載盡きせぬ社會の溷濁だが、己を欺き他を欺きても、其由る所を行ひ得さへすれば可しと云ふのが、古來方便說の主眼であるだけに、これまでは皆恬として怖れず

怪まず行つて來たのだ、

其他示現と云ふたり、又夢想と云ふたり、種々奇怪仙術めきたるもの世には澤山あれど、一を推して十を知れだ皆全一理法の下に解說の付くことばかりである、

いざや、これから類似の諸術と云ふ中で有名のもの二三を解剖して一層の疑團を釋いて見ようか

秘事めきたる魔術めきたる感應術類似の事は、神道の中にも佛道は勿論、亦、武術の中にもあつた、世に名高き蟇目の法、或は、忍術さやらんの如きは武士が專ぱら行ひたるものだと聞いて居る

眞言宗の僧俗には、修驗と稱へて奇を衒ふことを好んで却々魔術めきたることを玩んだものだ、そして言ふ毎に眞言秘密、法術、印を結ぶ抔の語を動もすれば交へたがる、元來歐米に、行はるゝ、催眠術でも十九世紀の始頃の傾向はこれを迷信の側へ持て行きたがりて、少しく人目を驚かす樣な現象を起すが否や、直に秘密と云ひ出したことがあるのだ、これと同じで秘密は眞言の專賣であるかの樣になりて居る、さて眞言で云ふ術の數を列擧したなら枚擧に遑は無いが、中にも讀心術、防火術、鎔金術、隱形術、五遁術、化身術、調伏術、蟇目の法、加縛

の法、噫、縷指眞に煩に堪へない、神道で云はゞ、鎭魂術と云ふがあるゲナ、寄神術と云ふのもあるゲナ、寔に數限りも無い、

（隱形術）　一に忍術とも云ふのだ、其方法は之云へば、屁の如しだ、即ち袖中で他人に知られぬ樣に右手の示指を左手の掌にて握り詰めて、われの姿体は他人には見へぬのだと自信するまでのことだ、斯かることが、理法上會得の行くべき筈は無いが、實際或る場合には隱形するが不思議だ、これを科學術に說明すれば、巳が自信力を以て對者に感應を與へ、それで對者に視覺と聽

覺ごの錯誤を惹き起させると云ふだけのことだが、古人の襲用上の經驗を調らべて見ても、必しも僞でない、亦余輩が實驗して見るに對者が婦人か又は理性の仝しき傾向のある人たちであれば十中一二は行ひ得らるゝのだ

（二）鎔金術、これは眞言秘術の入門に行ふ所の秘術だ、大小は仝じ道理であるが例令ば火箸を左の手に握りて右の示指の指先きで、其火箸の中央点に水と云ふ字を三度書き「カンマンボロン」と云ふ呪文を唱へて火箸の上端を前へ引けば、それで火箸は曲がるのだ、この

術は實際行る人が幾干もあるが、併し、これ亦呪文がきくでも何でも無い、物理學上に云ふ「力」を一頓に一所に加へるの法だけで、其一所と云ふことが心意点に最も注意を集めたる一点だけのことだ、仰々しく云へば鑛物に及ぼす感應術であるし、單簡に云へば心理、物理、相應じたる力の集め方だけのことだ、

（三）鎭魂術、これは神道の極秘であるゲナ、俗間所謂神降ろしの一種で、其法はまづ神殿を飾るに莊嚴靜肅の法を盡し、神前には一本燈心の燈火只一点を燈し、神主は頗ぶる異樣の白衣を着するのだ、そして病人は必

ちず五人を一座として集めて置きて後、第一に神主は、この病人に命じて、この神燈を注視することにするのだ(凡十分間)、それより神主は祝詞を上げるのだ(凡十五分間)、そして、この間に病人には各希望の病氣平癒を一心專念に默禱せよと命ずるのだ、次に神主は石笛を吹くか又は八雲琴を彈ずるのだ、これは神を喚び下だすのだと云ふ(凡そ十分間)然かする中頓がて病人は或は踊るもあり、寢るもあり、宛から睡遊の狀態に陷り恍惚として我を忘れ無何鄕に遊べる人と爲る、この間は只無心であれかしと豫ねて命じて置き最後に拍手三

拍で術が終りになるのだと豫しめ云ふて置く、一定時を經て後、拍手の音と共にこの境遇より離れるのだ、これに依りて病人は其病を確に癒やし得るは事實ではあるが、さて、この方法は如何に巧に感應術の方法を應用したるものであろうか、神燈を注視するは視神經を疲勞させて、下級精神機能を休止させる所以で、默禱十五分の時を費させるは自己をして自己が感應を與へさせる譯ケなのだ、又石笛を奏で、樂を爲すは其感應の力を生理的に發現させる爲なのだ、研究し來れは一點一畫も感應術の原理に漏まらざる無しだ、(後章催眠術を熟讀

すれば是亦瞭然として判る）

（四）幻術、これは輓近東海道界隈で行はれて居るものだ、これは何某が信心修行の結果阿彌陀如來の功德に因りて爲し得られる靈術たと稱して、大に跨大の吹聽をしては居るが調べて見れば屁の如きものだ、其方法は水晶の玉を充分注視させて置く間に、其被術者を睡眠の狀態に陷入れるのだ、これを幻境に入れると云ふては居るが、事實は睡眠術を懸けて睡眠狀態にすることなのだ、それから病者に對して病を癒するには耆婆扁鵲を冥土から召喚して遣ると云ふのだが、これは

催眠術上の幻覺を利用して然かく思はせるまでのことだ、又醒覺後に於て術者を阿彌陀佛だとして術者自身を拜禮させるといふことだが、これは醒覺後の殘續睡眠 Posthypnotismus で何の理由も無いことだ、催眠術で行れば彌陀は愚かな事閻魔にでも鬼にでも云ふが隨意々に術者を見させ得るのだ、余輩の感應術に比ぶれば天壤の別ありとでも云ふ程の淺薄なものだ、序からして記して置く、（これは後章催眠術を熟讀せば自から了解が能きる）

以上載した如くで、世に類似の諸術、極めて多くありと

云へとも、孰れも、余輩の主張する感應術を以て解釋し得べく、亦行ひ得べきものみたり、學者心して學ばば、其處に達するは、蓋し何んでも無い、極く容易のことゝ信ずるのだ

第六章　催眠術及要訣

前章に於て記述した如く、余輩の主張する感應術は即ち催眠術の方法を藉りて行ふのだ、それを此處には順序として其催眠術と、其實施上の要訣とを精しく説明しようと思ふ、

被術者ノ身體ニ觸接セスシテ術者ノ一眼ヲ注視セシムル狀態

催眠術Hypnotismusといふ名は英國の外科醫「ブレード」が十九世紀の初めに當て希臘語のHypnos（睡眠）といふ字義を取て附けたのだが、其專門の學者が誇稱して居る程に催眠其事には効驗はないのだ、睡眠をさせてから後に施こす方法が凡てに効驗を來すの原因になるのだ、然るに催眠學者又は心理學者の或るものは催眠術の歷史として古代埃及巴比倫等に行はれた降神術だの又は東洋にある諸々の秘術祈禱だのを此中に數へ立てゝ居るそれらは感應術の部に入るべきもので催眠術では無い、即ち確に「誤謬」と云はなければならぬ、

催眠術の正確なる歴史を尋ねたらメスメル住が元祖であるかも知れぬ、今の如くに發達し來たのは「プレード」「シャルコー」「リボー」等の功績なのだが併し、事實は未だ今日でも完全の發達はして居ないのである殊に我國では一二の學者が精神病治療に應用を試みた位の事で他には殆んど其術を知悉して居るものは甚だ少くない、余輩とても必しも先輩を以て傲然たる譯ではない自ら以て淺學を期して居るが亦窃かに人後には落ないと覺悟して居る、

淺學なれとも盡した所の考究と僅少なれとも得たる

所の經驗を列ねて同學同好の士の參考に供して見よう、

（一）睡眠に關する學說

睡眠は云ふ迄もなく生理的の一種の現象だ其狀態は恰も大腦半球を除去したものゝ如くで、五官の刺戟には應じないし、隨意運動は發しない、精神機能は睡眠の度に因て多少の區別こそあれ、云はば全然休止して居るのだ、夫れでは死と如何に異なると云へば睡眠には自動的及び反射的運動即ち呼吸血行腺分泌等の作用だけがあるのだ、睡眠の原因は何かと云へば神經中樞

器の疲勞で腦の灰白質の新陳代謝機能から生づる一種の生産物の中毒に因るものなのだ、そして其生産物は乳酸であると云ふがこれは未確定の說で筋肉の實質に生じて疲勞の原因となる生産物はそれこそ乳酸であろうが睡眠の原因となるべき腦の灰白質中の生産物はそれと同じものであることは余輩も信じないのだから一言を添へて置く、

次に睡眠の第二原因卽ち誘因として敎へ得べきものがある、夫れは腦の貧血だ、例へは食後、入浴後、酩酊時等に能く眠り得られるのは卽ちそれだ、又五官の刺戟を

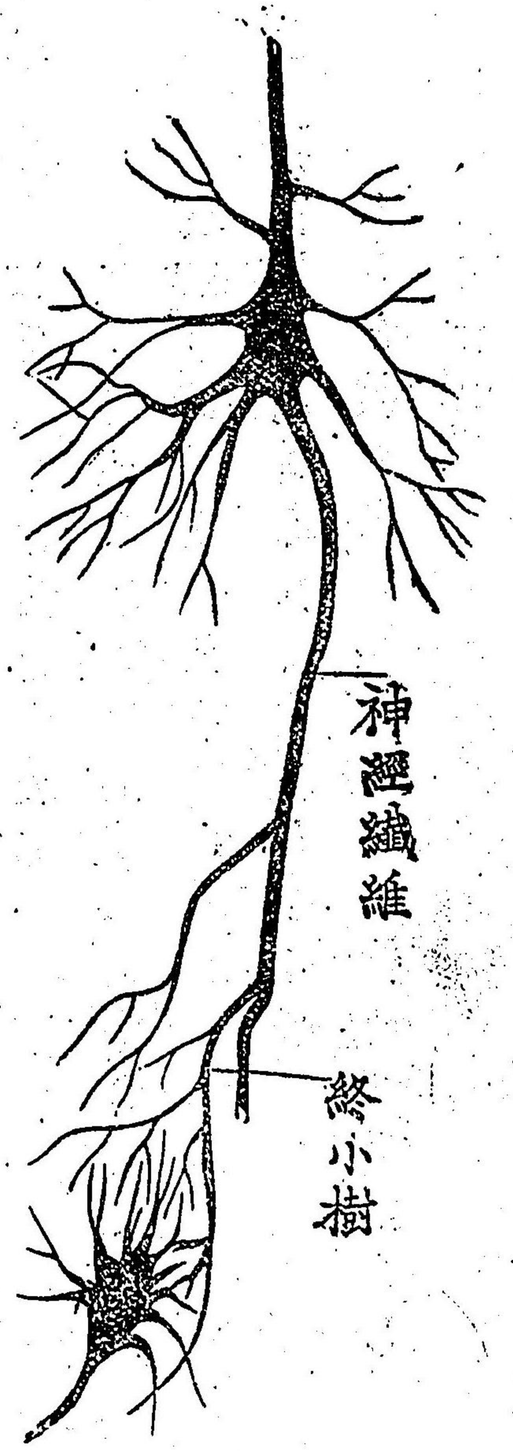
久しく重ねるのも、それであるし又倦憊其もの も誘因の一つだ、例へは千篇一律單調不變の音響を聞かせて繼續したる刺戟を與へれは眠るし、又熱鬧極まる場所などで俄に寂しくなると大抵の人が眠くなるは皆人の知て居ることだ、又五官の刺戟の減弱するのも誘因の一つで卽ち恰好其例として見るべきものがありしことを聞いた、それは曾て大學醫院に聾者で眇者で其上に中風を患へて居る老人か治療を受けていたことがあつたが、此の老人中風のことなれは勿論觸覺の大部分は麻痺れて居るし、又聾者であるから聽覺はない、

五官の中で可なり普通の感覺力を備へて居るのは只一眼の視覺のみだ、處で毎常も此一眼を閉ぢてさへやれば必ず眠るが常であつたゲナ、なんと刺戟の減弱が睡眠を誘ふことの良き證例ではないか、

睡眠時に於ける腦の狀態の變化に就ては未だ卓絶した高說は見ないが只一つ最近の學說として記すべきものがある、夫れは組織學上の發見だ、即ち「ノイロン」に就ての實驗で腦細胞から發する處の神經纖維と其末端終小樹とは醒覺時には樹枝狀の散開をなし、睡眠時には收閉すと云ふだけのことだ、睡眠に關する學術上

の說明これにて足りて居ると信ずる、

大腦の細胞



(二) 催眠術を行ふの準備、

催眠術を行ふには先づ先づ左の準備が肝要だ、

(イ) 室の靜肅なる事、

これは聽官の刺戟を避くるため、

(ロ) 被術者の身体を安樂なる位置に据へる事、

これは觸覺及筋覺の刺戟を避くるため、

(ハ) 室内に適當の溫度を保たしむる事、

これは外表の血管を適度に擴張させて腦の貧血を助成するため、

(ニ) 被術者の精神を安靜ならしむる事、

これは被術者に疑懼心と恐怖心とを去らしむるため、

(ホ) 被術者をして催眠術と其術者とを信仰せしむ

ること、

これは取り分けて必要なのだ、先づ初めに充分の說敎を加へて術者の人格と技倆との信用すべきを敎へ、次ぎに假りにも術者の命令に背かぬ樣に從順といふ觀念を持たしめ最後に此術には反抗の意を挿さむが如きは決してなすべからずと懇々たる敎訓を垂れ所謂(コンフィダンツ)(信仰心)を出來るだけ强く篤く起てさせるのだ、これ最も必要の條件で催眠術には擘頭第一の秘訣要領だ、即ち意志聯合と云ふて術

者と被術者との意志を結合する用意にて供するし、亦容易く睡眠させるがために供する、

（但し若し此の信仰心無しに只生理學的の方法で強て眠らせるときは意志聯合の關係をなす能はざるの恐がある）、

（ヘ）なるべく入浴後又は適度の食後等の時を撰ぶこと、

これは腦貧血を招くの一助となすため、

（ト）なるべく臥位よりは坐位を取らしむること

これは前項同一の理由に依る、

（但し坐位とは日本流の坐位で無い椅子に懸けさせた位置を云ふのだ）

術者にも準備が要る夫れは

（イ）自己の意志を強くして己れ先づ必ず其の術を行ひ得べしと確信すること、

これは自信の觀念弱く自己の技術の成功如何を疑ひなとするときは決して良き成績は得られぬ、又被術者の身分學殖等に憚りなどすればこれ又、良き成績は得られぬ、貴賤高下には毫も頓着せぬことだ、

（ロ）技術に熟練すること、

経験の度を重ねずば妙所に達せないのは何に付けても同じだそれでこれは細心注意して機會あるたび毎に逸せずして試むる樣に瞑めるが良い、又同時に怯めず臆せず我が意志を強めて我れ先づ何人にも必ず成功すべしと信ずるの心を養はねばならぬのだ、

（三）睡眠術の方法、

本章の前項で説明して置た準備が整へば夫から直ちに術を施して睡眠させるのだが、方法を施す前に尙一

トつ注意がある、それは如何なる場合にも必輕舉をしてはいけない、能く被術者の狀態を見濟して充分機會の熟するを待つて手を下すのだ、さて其方法として格段な手段があるのではない、實は術者と被術者とに強固なる確信があり、動かぬ强き意志と其注意が備つて居さへすればそれで良いのだ、他には何をも要せぬのだが併し、夫れは口でこそ云へ實際は完全無缺の程度迄は到底行れないことであるから、特に方法を定めて之れを行ふことにするのだ、

方法には精神的方法と物質的方法との二つがある、甲

は佛國の「リーボール」と云ふ人の初めた方法で輓近の斯道の大家「モール」氏等の頻りに行ふた方法なのだ、夫れは先づ被術者に睡眠しなければならぬ、之れから睡眠するのだ愈今睡眠すると云ふ睡眠の觀念を充分に惹き起させて置いて後、術者は只一言眠れと命ずるはかりでことが足りるのだ、啻に言葉で命ずるに限らぬ手紙でも電話でも用ゐて其意を傳へさへすればそれで可いのだ、

乙は即ち物質的の方法なので、それは一二の感官を強く刺戟して精神を其一方に集注させて其他の機能を

休止せしめるのだ、而して其感官が疲勞すれば遂に全部の機能(反射及び自動機能の他)が休止して睡眠の狀態となるのだ、其方法としては、一の物体を注視させる、而して殊に強き光輝と赤色とを撰んで應用する、それは網膜を疲勞させることが速いからなのだ、又單調一律の極めて平靜なる音聲を聽かせるの法もある、又極めて輕く皮膚を摩撫して注意を此所に引かしむるの法もある、

從來生理學の試驗として行ふて來た方法は、一の光輝ある物体を眼前の上方に置いて之れを眼球上竄の位

置を注視せしむること數分間、而して其後、顏面と上肢とを摩撫するのだ、すると頓がて睡眠の狀態となりて來る、それから或方法(玆に必要なく且危險の恐れある)に依り之れを省く、に因て「カタレプシー」(蠟狀强直)を起させ又「ソムナンブリスム」(睡遊狀)に至らせるのだ、而して又其醒覺法は顏面に呼氣を吹き懸けたり、或は冷水を以て拭ふたり、逆施倒行に皮膚を摩擦したりするのだ、若し又それでも猶醒めぬ時は「アンモニア」を嗅がせるのだが必竟之れ等の方法は實に唯器械的の方法で生理的變狀を起させたゝいふだけで醒覺法に在て

も實は失神者の治法と異なる事はないのだ、

さて現今吾人が行ふ實際の方法は左の如くにするのだ

○前述準備の諸項で說いた如く、被術者を適宜の位置に置いて一物を物質的方法の如くに注視させる、然る時は五分か十分或は二三十分で眼球結膜は充血して來る、流涙を來たして來る、遂に眼球疲勞のために睡眠の眼狀を呈して來て自ら眼瞼を開いて居ることが能きなくなりて來る、そこで眼瞼を閉ぢさせて「睡眠せよ」又は能く睡眠れると云ひ聞かせつゝ、先

づ顔面又は頭部を輕く摩で下すか、或は又肩胛部から上肢を指の尖端に至る迄「ズット」摩で下すか、これを數回繰りかへして行ふのだ、すると凡そ眼を閉ぢてから十分乃至十五分も經たらば普通の睡眠狀態即ち第二度睡眠に爲りて來る、

○尙前述の法と同じ法で注視せしむる赤色光輝の物体の代りに術者の一方の眼球を見せしめても可い、

○又同じ法でありながら注視物を左の如く用ゆる事がある、即ち二ッの小さい鏡を左右各反對の方向に回轉しつゝ之れを熟視せしむる法もある、

○又余輩は前記の注視物を左の如くなすを便利だと考へた、即ち一手の拇指根を赤き布片で卷いて其拇指頭を被術者の眉間に宛て、他の四指を前頭に置いて眼を上は向きにさせた後其赤色の布片を注視せしむるのだ、

○尙これ等注視の方法を行ふに就て被術者の神經が若し過敏で他の些細なる音響に感じ易い場合があらば注視の時に際して、術者は極めて平調低音で一二の數を言ふて之れを心に數へさせつゝ注視せしむるが良い、又此數を心に數へさせると云ふ法を行

へは之れのみで注視を要せずして事の足りる場合が幾干もある、盲人の如きには多くは此法を用うるのだ、

○又術者の一方の手を顱頂に置いて他の一方の手を項部に置く、而して眼を閉ぢさせて頭を徐々に回轉する法もある、總じて術者の一手は被術者の項部を輕壓し少しく握る如くするが良い、之れは頸部の皮膚を緊張するから總顔面靜脈を輕壓して顔面及び頸部の外皮に充血を來して頭蓋腔内の血量に對して自ら腦の貧血狀態を招くので、自然に睡眠の誘導

となる譯けなのだ、

○又被術者をして或一事に充分注意させて置いて突然大聲を發するか、或は大なる響を起して驚愕させる、それと同時に其途端に睡眠せよと命ずるのだ、其後は前記の法と仝樣にする、其他一手を以て被術者の一手を握りつゝ他の一手を前頭に置く法もある、又術者の手を温めて前頭の附近へ安置する法等もあるがそれ等は皆用ゆるに足りない方法だ、

又神經過敏症の如き睡眠することの能きぬものには藥物の力を借りて行ふこともある、其法は「モルヒネ」皮

下注入をするのが通常だ、けれども神經過敏のものに在りては「モルヒネ」の注入は却て興奮して睡眠せぬ場合が多い、これに反して抱水「クロラール」の内服は數々卓効を奏するのだ、又「ズルホナール」「臭素「ナトロン」」等も屢効驗がある、又「クロロホルム」吸入は勿論最も効がある、

(四) 催眠術に因れる睡眠の概説

催眠術と云へば其名の耳に新らしく響くが爲に、從て、格段奇異の感覺を與へる、併し其方法は前章に説いた如くで極めて簡單なのだ、殊に熟練を經て精神的方法

を自由自在に活用し得られる樣に爲りて來た曉は、只一言の命令で事足りるのであるから尚以て簡單である、それで初めて斯道を研究する人には却て一時は呆れる位であるが、又一方からそれを常理常識に訴へて考へて見ると、易々として會得の行く解説の途が付くから、こゝには其概説を特に一項として書いて置かう

抑も普通の睡眠(催眠術の爲に眠るのではない)の時には、其人の精神は如何な狀態で居るであろうかだ、多くの人は何事に付けても不注意勝ちであるから、恐らくは毎夜の睡眠の如きは只習慣で疲勞で睡りて仕舞ふことゝのみ思

ふて居るであろう、が併し、これを注意して心理學的に研究して見ると、人の睡るや必まづ吾れは睡ろう、イザ寝ようと云ふ觀念が起りて來て、それで睡り得るので、睡るまい、寝ては爲らぬと思ふて居るならば其睡るまじと云ふ觀念の強ければ強い程益睡り得られぬのでは無いか、必意睡眠と云ふ事實は睡ろうと云ふ觀念の結果なのだ、催眠術で術者を信仰せしめよ、術其者を信ぜしめよと呶々するのは、即ちこの「いざ睡ろう」と云ふ觀念を起させるための方法なのだ、又普通の睡眠を招くのに人は多く如何な手段を取るのであろうか、即ち

先づ暑からず寒からずの境遇を作るを無いか、言ひ換へれば冬は外氣が冷かであるから褥中を温暖にして体温を保ち易くする、夏は外氣が熱いから颯々の風を入れて涼やかにして体温の飛散を助ける、而して身体の位置は成るべく安樂平靜にして四肢五体の筋肉の穩かに伸張することを企てる、そして新聞又は小説の如き目には視れども格段に精神を勞せず、殆んど無意然として讀み得らるゝ類のものを眺めて居る間に眼は疲れて、精神は倦んで吾知らず睡魔の境に入りて仕舞ふ、催眠術で云ふ物質的方法は即ちこの方法を襲用し

て居るのだ、

普通の睡眠と催眠術の睡眠とは道理は全一なのだ、只普通のは、云はゞ自然的睡眠で催眠術のは人工的睡眠だ、人工的だけに睡眠の來る時間も早いので、これは睡眠促進の方法も自から含まれて居るからだ、

普通の睡眠は余程の熟睡でも、傍人が呼べば直に目を覺ますし、亦身体に輕度の動搖を與へても直に目を覺ますが、催眠術の睡眠には、それが無い、啻に無いのみならず、覺まそうと思ふても傍人の所作では却々覺め無い、甚しきは打擲しても或は椅子の上から突き落して

も覺めない、只術者が施す醒覺法にのみ應じて即刻に覺め得るばかりなのだ而して一旦催眠術で睡眠した以上には傍人が大聲疾呼しても耳底には達せずして却て術者の低語が能く聽こへる、ナント奇怪の現象では無いか、これには所謂「意志の聯合」(次項で說明する)が着けてあるからの事ではあるが、如何にすれば其樣な聯合が着け得らるゝのである歟、良き序であるから、是も併せて解說して置こう、

試驗前の準備復習に徹夜の勉强をしたことがある學生などには經驗のある事であるし、又思想家などは屢

實驗して能く知了して居る事實がある、それは即ち何か或る一事に意を熱注して其事をのみ考索し詰めて居る間に身体は睡魔の擒と爲りて思はずも寢て仕舞ふことがある、けれども、其際に勉強思考力の旺盛である場合には、身体は寢ながらも、精神は寢ねず、徹晝徹夜考へ續けて居ることがあるでは無いか、これは普通の睡眠時でも尙人の精神機能の一部分は休止を爲さずに作用らくことが出來得ると云ふことの證例だ、催眠術に於ける意志の聯合とは即ちこの機能を殊更に起して利用することなのだ人は自然に克つ能わずで、如何

なる事でも、天然在り來りの作用と其法則との外へ出でゝは、何事をもすることは出來ぬのだ、催眠術も亦それで、人に賦與されたる普通の睡眠の方法を觀察して其原理法則を見出して、これを作用して居るまでのことだ、恰も電光と云ふ現象が天然自然にある、それの原理と法則とを究めて人工的に發電せしめて電燈として利用するのと同じことなのだ、漫りに難事がることは無い筈だ、

(五) 意志聯合

Rapport（ラッポルト）と云ふ字には適當の譯字がないのだ夫れで假

りに意志聯合と譯して置いたのだが其意味は術者の意志と被術者の意志とに交通聯合をなさしむる事で、其方法が實に催眠術中の一大秘訣であるのだ、世には催眠術を施し得る者其數少からず其法を會得して居る者は幾干もあるが多くは只睡眠させる丈けのことで余輩の主張する感應術の爲めに應用の出來ぬのが多い、夫れは此の意志聯合をなし得ずしては到底出來ぬからなのだ、又催眠術で謂ふ暗示を施し得らるゝのも此意志聯合が着いての上のことだ被術者を死人同樣の睡眠に陷らしめたばかりをとうすることもなら

ず困難する術者のあると云ふことは能く聞く話であるが、要するに夫れはこの秘訣を辨へぬからのことだ、意志聯合とは催眠術を施しつゝある間に術者と被術者との双方にのみ交通する心意の作用なので術者の意志命令音聲姿容形貌が直接被術者にのみ影響し其の反應を來たさしむることを云ふのだ、諸々の感應作用も摸擬作用と皆之れを通して來るのだ其方法は被術者の今正に睡らんとする一刹那其機會の瞬間に術者が一言を發して術者に對する尙一層の信仰と注意とを呼び起し確實の依賴的觀念を持たさせる丈けの

ことた即ち(眠り得るイザ眠るべし)と云ふてさへやれは、被術者はさては睡らして呉れたなと確信して彼れの心意を我れに輸するのだ、而して夫れで聯合が着く、若しこれを着けなければ只徒らに睡る斗りに終りて些の効驗をも収め得られぬことになるのだ、

(六)術中の注意

施術するのに被術者の位置は坐位でも臥位でも左程の關係もないかの如くに思われるが、余輩の經驗では早き眠りを招くには坐位(椅子に凭たれる形態)の方が良い、が併し、此坐位は動もすれは眞の腦貧血を起し易

い傾向がある樣たから若し施術に際して腦貧血を起して顔面蒼白冷汗淋漓脈搏細數悪心嘔吐搐搦卒倒等の症候を來すことがあつたらば速かに施術を中止して平臥の位置に變へてやらねはならぬ、而して安靜に放置して小量の葡萄酒でも與へて興奮させればそれでよい直ちに快復もする、若し又此の腦貧血が深き睡眠時に發したなら、其の儘前記の方法で快復させるが可い、通常こんな場合には腦貧血が快復しても依然睡眠中に在るのだから、醒覺法を行ふてさらに之れを醒覺させるのだ、これ注意の一た、又施術上の成績が幸ひ

に良好であつても醒覺後には多少の不快の觀念身体倦怠の感覺頭重眩暈眼球の疲勞等の症候が殘り勝ちなものだからそれは豫め醒覺の前に當て(汝は醒覺後には頭重も倦怠も疲勞も何ンニモナイ身体精神極めて爽快活潑でアルゾ)と暗示(次項に說明する)を施して置く即ち耳邊で云ふて聞かして置くのだ、これ注意の二だ、それから又初學の輩は動もすると催眠術を施すに當りて意志聯合の成立しないことがある、否成立しない場合が多いのだ、斯かる時には術者は大抵周章狼狽して死体に彷彿たる如き睡眠者を視て驚きもし又急

に醒覺させたがるが通例だ、けれども、それは乞ふ憂ふる勿れだ、必ずしも驚くを要せぬのだ、斯んな時には醒覺法を強ひて試みてはならぬは勿論のこと其儘安靜に放置しておくがよい、さすれば、普通の睡眠に移り來りて二三時間の後には必ず醒覺し來るものだこれ注意の第三だ、

(七) 睡眠狀態

一口に云へば睡眠狀態だが其深淺の度が著しく異なりて居る、この度に就ては多くの學者が種々に區別して或は二階級に大別したり、又三程度に分けたりして

居る、現に「シャルコー」氏は三度に「デルブーブ」氏は二度に「リボール」氏は六度に「ベルンハイム」氏は九度に分けて居る、けれども余輩は實地應用上左の四級に分けるのが最適當且便利であると思ふて居る、

第一度　薄睡狀態

これは半醒半睡の狀態で俗に云ふ「寢かけて居る」といふ場合即はち Leises Schlummer の狀態なのだ、夫れだから勿論耳も聽へるし、目も見るし、語ることも、四肢を動かすことも、すれば能きるのだが、只それを仕樣とは思はず、又五官の感覺を働かせようとも思はぬのだ、寢ようと云ふ觀念の方が強くて五官を作用かせようと云ふ觀念の無い時なのだ、即ち、然かく思ふべしと云ふ意志の作用の、止み來つた時の狀態を指すのだ、從て其時間に於て在りし事柄は皆醒覺後に至るまで記憶して居るし、又多少の反抗心の有るが常なのだ、外部に現われたる變狀は如何と云へは顏面だの耳翼だのに稍漲紅を來して居るのと、眼球が上竄して居るのと、瞳孔が散大して居るのと、身体の全体が靜に存在して居るのとだ、

第二度　熟睡狀態

これは普通の熟睡 tiefer schlaf の狀態と殆んど全一なので、普通睡眠の時に具備して居る生理的の現象は悉く存して居る、唯普通の睡眠狀態と異なるのは普通の時は他人から言語を懸けても耳へは入らず、又睡眠者自から何をも語りはせず、即ち五官の動作は全く休止して居るがこれに反して、此熟睡狀態では術者の聲には被術者の聽覺機能を顯はし術者の問には應答して聲を發するのだが併し、これは術者に對してのみのことで、他には應答も聽覺をも作用かし得ぬ(意志聯合があるからだ)、

この狀態を指して即ち第二度とは云ふのだ、外部に現われたる變狀はと云へば是亦猶普通睡眠と全一で顏貌の相恰崩れ、四肢萎軟し、脈搏緩徐となり、呼吸深大となり、鼾聲は發するし、眼瞼の反射機能は止むし、顏面筋に搖搦を起して來るし、又垂涎するのもある、そして此狀態中の出來事は其醒覺後に記憶して居らぬのが常なのだ、

第三度　蠟狀强直狀態

之れは第二度の狀態と左程變つた處は無い、只熟睡狀態よりは睡眠の狀態が深いので從て凡べての暗

示が皆確實に行はれ得るのだ、そして此度の狀態では被術者の四肢五体の位置は常に術者の與へた儘の形狀を何時迄も保續て居るのだ、若し術者が手を擧げた儘で置くならば其手は更に術者が下げ來るまでは少しも原位置を變へずにある、即ち Katapsiee の狀となる、それでこれを蠟狀强直狀態と云ふのだ、外部に現れたる變狀は第二度に比ぶれば寧ろ醒覺に近づいたかの如くに思われる、即ち眼瞼は微震して來て反射的の機能を示すし、四肢の萎軟は止むし、術者に向て應答する睡眠中に言語は余程明晰活潑と

なつて來る、

第四度　睡遊狀態

之れは睡眠の過度なる狀態と云へば謂ふ可きもの、外部に現はれたる現象は頗る醒覺の時の如くで、言語は明晰なり、動作は起臥・歩行・就座・飛躍等を正確になし得ることが出來るのだ、其狀所謂睡遊で寢惚た人の狀態、夜行病 somnambulismus 者の容体に彷彿たるものだ、只醒覺時と異なるのは醒覺時には言語動作を起すのに自已の意志の作用をもつてするのであるが、睡遊狀態には夫れが無い、即ち自働的には、何

にも出來ぬので、術者の命令暗示を受けて行るのだ、そして殊に一言添へて置きたいのは、第三度第四度の睡眠中に存した出來ごとは其醒覺后に於て更に記憶の無いものだ、但し之れに暗示を加へて其出來事の一部若しくは全部を記憶せしむべくすれば之亦充分出來る、

(八) 暗示

暗示(スッゲスチオン)Suggestionとは前項(五)の條下で説明した意志聯合を應用して既に睡眠しつゝある被術者の意志に或る事を傳へるのだ、意志を傳へると云へば甚だ語弊があ

る、術者の言語を以て睡眠して居る被術者の心意に一つの定まつたる觀念を起させるのだ、夫れで暗示には殆んど皆な感應を現して來るのが通例なのでこれは心理學上に説明すれば本來人には暗示に感應する性質が備へ付けられてあるのだが睡眠中は其感應性質が非常に強くなつて居るのだ、此の強い感應時を利用して暗示をすると即ち觀念波及の原理に基いて身体にも精神にも變狀變態を起して來ることになるのだ、暗示を施す方法は小聲で耳語するばかりのことだ、手調なる靜肅なる低音で確定したる宣言を與へてやる

のだ、例へば飲酒を禁じやうと思へば酒を飲むなと命ずるではない、「汝は酒を飲まぬ」よとの確定を與へてやるの類だ、暗示を施すのに假令ば「酒を呑んではいけないよ」と說諭をする人がある、が併し夫れは誤解だ、說諭は智識に訴へるもので智の判斷を經た後で無くば意志には爲らぬ、暗示は意志に直接に斷定したる言葉を觸れしめて「酒を飲まぬ」と云ふ觀念を起させるのだ、暗示の感應は睡眠の度其何れを問わずして爲し得らるゝのではあるが就中第二度第三度の狀態が尤も奏効確實なる程度なのだ、疾病の治療習癖矯正等は第

一度でも奏効せんことは無いけれども習癖上の痼疾或は腦脊髓系統に屬する難治の疾病等は第二度第三度の狀態を必ず要するのだ、

(九) 試驗

試驗とは第二度以上の睡眠狀態にある睡眠者に暗示を施して其暗示の感應に依て種々現れて來る處の影響變狀態等を驗めることなのだ、前章にも述べた如く暗示の範圍は極めて廣いので從て試驗も種々の点から施すことが出來るのだ、今二三其例を擧げて見やう、

隨意筋運動に就ての試驗、何れの部分の隨意筋でも、術

者が動かないと云へば、被術者の隨意筋は動かなくなる、例へば「汝の手は擧ぐる能はず。」と云へば再び擧げ得ると云ひ渡す迄は如何しても擧げることの出來ない狀態を持續するのだ、又被術者の手を握らせ握拳を作らせ「汝の手は開かぬ」と云へば再び「汝の手は自由に開き得る」と云ひ渡すまでは開くことが出來ない、又汝は全く啞と云へば其禁を解かるゝまでは何事をも言ふことが出來ぬ、又多くの言語の中一音或は二音を限て之れを言ひ得ぬ樣に禁ずることも出來る、即ち汝は「の」の字が言へぬと言ひ渡して後百人首の天智天皇の御

歌を言わして見ると「あき○た○かりは○いは○ごま」をあらみ」この如くに「の」の字の處は言ひ得ぬ之れ又次ぎに「の」の字も能く言ひ得ると言ひ渡たさねば此の狀態をいつまでも持續して居るのだ、

又感覺上に生じ來る錯誤の試驗即ち幻覺・錯覺を起させることが出來る即ち全然無いものが有る樣に見へたり、有るものが無い樣に見へたり、或は又石を見て犬だと思ひ羽毛を見て犬だと思ふたりするの類だ、例へば綿の小片を被術者の掌上に置て之れは甚だ重ひ物だと言ひ渡せば被術者は力をこめ汗を流して實際重

き物の如くにあつかう、又彈丸の重きを掌上に置きながら極めて輕しと言ひ渡せば被術者は之れを扛ぐるに苦しまない、又掌上に貨幣を置て既に密着して離れないと云へば決して取り去り得ぬのだ、又冷熱の感覺も錯誤する例へば温き室内の床上に被術者を立たせ汝は今雪中に立つて居るのだと言ひ渡せば軈て全身粟立して齒の根も合わぬばかりに寒がつて來る、之れに反して日中の炎天である熱くあると言ひ渡せば汗を流し顔面を赤くし暑熱の時の如くに感じて來る、又味覺・嗅覺に於ても又同樣の錯誤を來すのだ、水を飲ま

せて酒であると云ひ渡せば啻に然かく思ふばかりでない、實際酩酊したからの如き容体になる、蠟燭を菓子と思ふて喰つたとは名高い實話であるが實に其通りである、糞臭を香水と嗅き誤らせるのは何の造作も無いことだ、又疼痛癢痒の錯誤も出來る、痛くないと言ひ渡せば針を皮膚に刺しても疼痛を覺へず、痒ゆしと言へば何事もないのに痒ゆくなる、

幻覺に就ては面白き試驗がいくらもある、夫れ其處に犬が居ると云ひ渡せば何物もないのに犬が居るかの樣に覺へて之れを逐ひ拂ふが如き狀を呈する、又隣室

に聲がすると言ひ渡せば其聲が聞ける、又名刺大の白紙數枚を取り之れは赤色なり之れは青色なり之れは紫色なりなど各異色を以て言ひ聞かせ置き後ち更に此數を交へて被術者の手に渡し、此の中より赤色又は青色を拔き出せと或る一色を限りて命ずる時は先きに赤色として渡したる白紙を撰んで出して來る、又白紙を示して之れは某の寫眞なりと言ひ渡せば必ず其通りに見ゆるので之れを利用して被術者の意中の人を探り出した例があるが、其他前述の現象の反對で或る物を無いと思わせることが出來る、即ち盲者聾者と

同樣に視聽の作用を中止させてしまうのだ、次ぎには食慾色慾等を前述したと同樣の道理で止めもし、又盛んならしむることも出來る、記臆力を增進せしむることも減弱せしことも出來る、

次上の試驗は只夫れ現時の感應ばかりではないので暗示には凡て殘續的作用が在るのだから此作用も自ら行はれて居るものと思わなければならぬのだ、

說明上の便利の爲めに此處で此の殘續的作用と云ふことを說明して置くが、夫れは睡眠中に施した暗示の作用が醒覺後にも殘續して働くことを指すので、蓋し

之れなくては催眠術も感應術も價値はないのだ、即ち睡眠中に於て暗示を施こす場合に「汝は醒覺後何時間を經ば云々」のことをする、或は「明日は何々をする」或は「今後は何々せぬ」と言ひ渡せば其通りになるのだ、此の殘續作用を施すと又更に面白き試驗が出來る、即ち汝は今後余の顔を見れば阿彌陀佛として拜するなりと言ひ渡せば其の如くになるのだ、

睡眠者に命じて隣室に人幾人ありやを見來れと言へば殆ど百中九十の例を以て適中する程に確實なる應答をなすのが通例だ、東京に居ながら大阪の事を知らしむることも臺灣で千島の端の事を探らさせるのも同一の理で能く出來得る、軍事探偵や相場の場所偵察などはこれから割り出したものだ、

強直の試驗には被術者の身体を棒の如くにして其上に人を載せ得ることは既に多くの人の知て居る事實だ、

更に暗示の感應の殘續的作用の實例を繰り返せば左の如きことがある、即ち

汝は醒覺后三度廻つて叩頭する、

汝は醒覺后一時間を經て庭を一週する、

汝は醒覺后直ちに飯を食ふ、

汝は明日某の處へ行く、

汝は自己の名を記臆し居ること能はず、

汝は毎日午砲を聞けば其后一時啞となる、

汝は毎朝何時何某の姿を見ること能はず

汝は醒覺後人に會するも帽子と衣服とのみを見て其人を見る能はず、

など之れを睡眠中に暗示し置けば醒覺后即ち殘續的作用で皆其の如くに實行するのだ、

不隨意筋に就ての試驗をも此の處で述べて置かう、そ

れは仮令ば汝は心機が亢進したと云へば亢進して來る、便秘すると云へば腸の煽動が止まりて便秘する、又惡心を催したと云へば嘔吐して來るなどだ、

其他或は胃腸にある分泌の作用は勿論身体各所の一切の分泌機能でも、又組織上の變化でも、即ち月經を增減若くは停止せしむることは同一の理法で出來るのだ、佛國では暗示の方法を借りて賣春婦が月經を抑止するのは有名な話しだ、又睡眠學上の逸話として名高き「フォーレル」博士の水泡論と云ふのがある、之れは睡眠中に或る局部に白紙を宛て行ひ仝時に其局部は火

傷して居るのだと暗示して置くと翌日其局部へ水泡を發して居る、又火傷治したりと暗示してやると其翌は其處に痂を結んで全癒すると云ふことだ、

總じて暗示感應の實驗は一回よりも二回と回數を重ぬるに從て確實に成効し來るのだ、

試驗の凡てを書き列らねんには千百の筆を禿らしても及ぶことではない、前章にも說て置たが古昔の仙人上人、魔術者等の行ふた奇蹟の不思義で無いことは此の暗示の感應に因りて能く判かる蓋し方法を盡して實驗して見れは何でも自由に出來るでは無いか、

(十一) 醒覺法

睡眠狀態から醒ますのにも精神的方法と物質的方法との二つがある、が併し、被術者を醒ますのに物質的方法を用ひなければならぬ樣な場合なれば既に睡眠の時に其の方法を誤て居た結果であるのだ、正しく睡眠されて居る以上は精神的方法丈けで充分の醒覺が得られるのだ、夫れは「イザ醒めよ」と一言命ずる丈けのことだ、が若し深度の睡眠である場合には此の命令を聞いて急劇な變化を起こし爲めに醒覺後數分間茫然自失の狀態に居ることもあるし又頭痛眩暈等を發する

こともあるから醒覺に伴ふ注意として醒めよとの命令を下だすには徐々に呼び活けるが可い、而して腦中に醒覺の準備をなすの時間を與へてやらねばならぬ即ち一二三と云ふ聲を聞かば醒めよと命じ置き一二三と呼ぶ間各十秒間位を置くがよい殊更に三の懸聲なす場合には之れと同時に被術者の耳邊に於て一回の指彈の音を添へてやるが可いのだ、

以上の方法で尚ほ醒覺せぬ時は少しく語氣を強めて此の方法を反復するのだ、それでも尚醒めぬ時は更に亦語氣を強めて叱るが如き口調を用ひて之れを反復

する、大抵は之れで醒覺するが、若し尚醒めぬばこの次には安靜に臥床させて置けば二時間乃至三時間の後に必ず自然醒覺し來るものだ、

（十一）催眠術の害

恐れる人が在て頻りに杞憂を抱て居る、夫れは催眠術を屢應用すれば或は莫兒比涅慢性中毒症の如くに睡眠癖となりはしないか、又之れに因て腦力の減損、身体の疲勞を起しはせないかと云ふことだ、されどそれは前條にも説明した如く醒覺の以前に當て暗示の方法を利用して身体の倦怠、精神の疲勞、不安など睡眠癖と

類似の症狀の起らぬよふに催眠術施行の都度其防禦と快復とを斗て置くから睡眠癖は望んでも釀し得られぬのだ、又催眠術に伴ふ弊害として姦淫、偸盜等を數へ立てるものもあれど之れは術者其人の人格如何に因ることで、正宗の銘刀も聖人と盜兒とを撰ばずして切り得るのが天地の大法であるから仕方があるまゐ、只婦人の施術には附添人を置く、又施術者の德義として不道德の行爲をせぬと云ふことに定めるより他に途はあるまい、併し後章にも述べては置くが催眠術は被術者が自ら希望する者にあらざれば之れを施こす

ことが能きぬのであるし、又人の意志に反するものには殊更應用の能きぬものであるから、局外者の思ふ程の濫用は、行はれぬ、乞ふ安神して可なりだ、

殘續的作用に就ては反面より觀察すれば恐るべきの個條素とより少なくはない被術者に其教唆者の誰なるかをさへ知らしめず自己の意志より發したるかの如くに、姦淫でも、偸盜でも、放火でも、殺人でも、させ得るが、併し天網の漏らさゞる驚くべしで、再び其人を睡眠せしめて之れを聞き糺さば、忽ち明白なる告白をさせることが出來るではないか、馬脚到底包み得ず其道に

自ら惡弊を防く方法は備へ附げられてある庶幾くは放神して可なりなのだ

第七章　感應療法の實驗

催眠術を應用して施こす處の感應療法は、從來催眠術者の施こし得たる効驗と似たるもの甚だ多しと云ふ譯けである、が細かに其内容を調べていふ時は甚だ大なる區別のあるを信ずるのだ、其區別は自ら判てくるが、今茲には兎に角も余輩の實驗を列擧して疾病の治療に如何に多くの効驗を奏するかを示したいと思ふ

のだ、

感應療法は精神病又は神經病にのみ効能のあるものと考へて居るのが世人の常であるかのよふだけれども實驗上及び學理上には決してそんなことはないのだ精神的に衝動を與へれば生理的に機能と形狀の變態を來たすのは体心相關の理論上確かなる事實であるし實際前記以外の器質的疾病に應用して著しき効驗があるのだ、

精神病者は概して睡眠せぬ外國の報告には其成効貳十「プロセント」と記してあれど實際は殆ど皆無位のと